
ピタゴラスちゃんのジレンマ

伊吹 由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピタゴラスちゃんのジレンマ

【Nコード】

N1365Z

【作者名】

伊吹 由

【あらすじ】

聖フィロソフィー学園・・・通称・テツ学。最近男女共学になったこの学園では、あらゆる生徒が哲学を中心に勉学に励んでいる。主人公のピタゴラスちゃんは、恋する乙女。勇気をふりしぼって、憧れの男子生徒にラブレターを届けようとするが・・・不可思議なミステリーに遭遇する。同じ倶楽部のデカルトちゃんやラッセルちゃんと共に、そのミステリーに挑むのだが・・・事態は思いがけない方向へと進んでいく。数学、物理、化学・・・全ての学問は哲学に通ず。実際の哲学論理的思考あり、哲学バトルあり、推理小説の

ような謎やどんでん返しあり・・・真実を証明するには？神は存在する？因果律とは？あらゆる哲学的要素を盛り込み、ピタゴラス達は困難に立ち向かう。そして彼女たちが行きついた先に見たものは・・・？

第1話 始まりはラブレター（前書き）

【哲学的な彼女】という企画に投稿を考えている作品です。この企画の要点は2つだと個人解釈。1つは「哲学に萌えを」（これ、企画側的には大事な点らしい）。そしてもう1つは哲学を知らない人が、「ふくん、哲学ってこんなものなんだ」と、入り口的な物が見える点。個人的には古代や近代あたりが好きですが、時空を超えてあらゆる世代の哲学者を登場させ、謎解きあり、哲学的論理解釈あり、バトルありという形で書いていきます。最後の最後には、多くの科学者が議論している1つのテーマを元に・・・推理的トリックを用意してますので、推理小説が好きな方は謎解きに挑戦してみてください。

第1話 始まりはラブレター

～ 第1話 始まりはラブレター ～

3月14日。

「哲学者として、もっと成長したいから・・・
簡単には、先へ行かせないで・・・」

。。。。。。。。。。

「はー!?!」

一気に目が覚めた。鳴り響く目覚まし時計を見ると・・・午前6時。

「。。。。。。。。」

なんかやけに・・・リアルな夢を見ていたような・・・?

「。。。。。。。。」

目覚ましを止め、夢の内容を思い出そうとするが・・・思い出せない。

「そうだ！」

この日は、私・・・ピタゴラスにとって、大切な日。

・・・。

いつもよりかなり早く起きた私は、午前7時前の誰もいない学園に登校した。

そして今・・・

ある靴箱の前に立っている。

「きよ、今日こそ・・・このラブレターを・・・
ルブラン君に・・・」

そう。私は今日、あこがれの男子生徒にラブレターを届ける。そのため、ほぼ徹夜でラブレターを書いた。1時間しか寝てないが、眠気はない。

「・・・」

直接渡す勇気なんてない私は、定番中の定番【靴箱にラブレター作戦】を決行するというわけだ。

「・・・」

学校の靴箱は、みな扉がついている。だからラブレターを入れて、扉を閉めちゃえば・・・誰かにそれを見られる心配はない。

「・・・・・・・・」

右手でギュッとラブレターを握りしめる・・・自分でどんな内容を書いたか、今は覚えてない。見返すと、届ける勇気が削そがれちゃいそうで・・・

「こういうのは・・・勢いが大事よね。」

見直しなんかせず、私が思ったありのままの・・・

愛の言葉で・・・」

ラブレターを握りしめたまま、しばらく靴箱の前でたたずむ私。この土壇場に来て・・・

トクン トクン・・・

心臓が高鳴り、行動を起こせない。

「このままじゃ・・・誰か来ちゃう・・・」

髪につけたアクセサリーの三角定木を、左手で握りしめた。 1・・・2・・・3の方。

「・・・・・・・・」

30度を握ると・・・少し落ち着きを取り戻す。

「よし！」

勇気を振り絞った私は靴箱の扉を開け、ラブレターを押し込もうと・

「!?!」

したその時だった。靴箱の中に・・・

【ルブラン君へ】

そう書かれた手紙が1枚、入っている。

「ラ、ラブレター!?!」

ハートマークのシールが貼られた、ピンクの封筒。どう見てもラブレターにしか見えないそれを見て・・・

「だ、誰が・・・?!」

私は呆然とした。

(第2話へ続く)

第1話 始まりはラブレター（後書き）

~~~~~

次回予告

謎のラブレターを手にとった私。その内容を盗み見た・・・  
そしてこのラブレターを書いたのは・・・？

~~~~~

次回 「 第2話 数学ガール？ 」

~~~~~

## 第2話 数学ガール？（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったたら・・・

その靴箱の中に、何者かのラブレターが！？

## 第2話 数学ガール？

## 第2話 数学ガール？

「……」

靴箱の中を覗き込みながら、私は思う。

「ありえない……」

私は昨日……最後に学校を出た。警備の人が出入り口の力ギを閉める直前まで、私は目の前の靴箱に三角定木をあてている。

ルブラン君がラブレターに気づいた時、最もインパクトを与えるため……

【靴箱とラブレターのサイズは、どんな【比】であるべきか？】

この問題を必死で考えていた。

「あの時は、上履きしかなかった……」

このラブレター、昨日はなかった。だとしたら今日……

「私より、早く来た人が……？」

リン…… ゴーン…… カーン…… ゴーン……

7時ちょうどチャイムが鳴り響く。

ガチャリ。

「!?!」

学生用入り口が開いて、誰かが入ってきた。

「カントちゃん……」

【近代組】の彼女は、必ず同じ時間の7時ちょうどに登校してくる。

「ど……」

パニックだった私。靴箱の前で、あたふたとする。とりあえずカントちゃんに見えないよう、身をかがめた。

「あら〜 こんな朝早く、珍しいわね〜 …… デカちゃん」

1つ向こうの靴箱で、カントちゃんの声が聞こえる。

「ど、どうしよ……」

私は思いがけず……

「……」

靴箱に入っていた、何者かのラブレターをわしづかみにした。

「……」

慌てて靴箱を閉めると・・・カントちゃんに見つからないよう、足早にその場を立ち去る。

「・・・誰が・・・？」

主のわからぬラブレターを握りしめ、自分の教室【古代組】へと走って行った。

・・・。。。

教室にカバンを置いたあと、トイレへ駆け込む。誰もいない個室に入ると・・・

改めて

【ルブラン君へ】

と書かれたラブレターを凝視した。

「・・・」

裏を見ると

【from】

そう書かれている。【】？ 何？ なんて読むの？

「・・・」



お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P . S .

あなたにとって、私が十分である必要はないけれど・・・  
あなたにとって必要になれば、私は十分です。

~~~~~

「・・・」

そのラブレターを見て、呆然とする。

「なんて、センスのいい・・・」

そして・・・

「これならブルラン君を・・・落とせる」

心からそう思った。と、同時に確信する。

「手紙の主は・・・」

数学倶楽部の人間だ・・・間違いない。

ライバル
恋敵は・・・

私の所属するクラブにいる。

(第3話へ続く)

第2話 数学ガール？（後書き）

次回予告

手紙の主は、私の所属する数学倶楽部にいる。
そう確信した私は、授業が終わった後・・・部室を探ってみた。

次回 「 第3話 数学倶楽部 」

第3話 数学倶楽部（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の主は、私と同じ数学倶楽部に違いない。

~~~~~  

第3話 数学倶楽部


~~~~~

### 第3話 数学倶楽部

午後3時。

最後の授業終了を告げるチャイムがなった。ショートホームルームを終えた私は、すぐに部室へと向かう。

【数】

【学】

【倶】

【楽】

【部】

部室の前にある、古びた立て看板。それを横目に勢いよくドアを開け、中に入っていった。15畳はある、まあまあ広い部屋。

「・・・」

部員は結構いるはずだが、9割以上は幽霊部員。入り口に入っすぐの壁には・・・数学倶楽部の部員が書いた、書き初めが貼られている。

【人間は、考える葦だっぴょん】

1番手前にあるのは、顧問であるパスカルちゃん先生の言葉だ。その横に、部員の言葉が続く。

【前に進んでるって？ 嘘、嘘！】

【我思う、ゆえに我萌え〜】

【万物の根源は・・・ 水であるけー】

【ナマギーリ女神の、おかげです】

【ひとなみに、おごってよー】

正直言つ。私はこの【ひとなみに・・・】の作品、大嫌いだ。

【神。お前はもう、死んでいる】

【余白が少なねーってば!~!】

【いまいましいフレンチマドモアゼル!】

【みんなの幸福の総和が、大きくなりま

用紙に入りきれてない。

【3 , 2 , 1 !      ラッセル      ラッセル      】

【天ではない、地が回っているのだ!】

.....

このような己の言葉を書道作品にしたものが、卒業生も含め50枚ぐらいある。

【3 ^ 2 + 4 ^ 2 = 5 ^ 2】

私は自分の作品を見ながら推理した。

「ラブレターの主は……」

学園の窓から見つめていると言っていた。

ならば卒業生は、犯人じゃない……」

私は自分も含め、在校生の作品を眺める。

「ちょうど20枚。その中に犯人が……」

いつの間にか私は……あのラブレターの主を【犯人】と呼んでいた。

部室の中をさぐり、何か犯人に繋がるものがないかを見て回る。でも……

「この部室。基本、紙と鉛筆と本しかないのよね……」

あとは、真ん中にテーブルが2つ。その周りに椅子が数脚あるだけ。本は結構あるけど、全て数学書。数冊の本を手に取り、パラパラとめくるが……

「……」

犯人に繋がるようなものは、見つけれない。簡素な部屋ゆえ、部屋の中の搜索はすぐに終わった。

「・・・」

犯人の手がかりは得られず、三角定木で頭をポリポリとかく。 1：  
1： 2の方で。

キーン コーン カーン・・・

校内放送だ。

【昨夜、校舎の屋上に小さな隕石が落下しました。

一部、金網に破損がありましたので、現在修復中です。

修復作業が終わるまでの間、全校生徒の屋上への立ち入りを禁じます】

キーン コーン カーン・・・

「・・・」

そう言えば昨日・・・何とか流星群の隕石が屋上に落ちたって、誰か言ってたな。まあ、私は星には興味ないけどね。

そんな事思っていたら・・・

数少ない部員が入ってきた。

(第4話へ続く)

### 第3話 数学倶楽部（後書き）

~~~~~

次回予告

部室に現れたのは、同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃん。

この日の数学倶楽部では、【集合論】を専攻しているラッセルちゃんの講義。講義の途中、4人目の人物が部室に入ってきた。

~~~~~

次回 「 第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん 」

~~~~~


第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん

部室に入って来たのは2人。

「はわ？ Pちゃん。今日、早いですね〜」

私の事を【Pちゃん】と呼ぶのは、【近代組】のデカルトちゃん。

「おろ？ ピタ子。教団の集会、今日はないの？」

そして【ピタ子】と呼ぶのは、【現代組】のラッセルちゃんだ。

・・・。。。

ここで簡単に・・・私から2人を紹介しておこう。まずはデカルトちゃん。【TRUTH】と書かれたバッグを持ち歩き、ポニーテールを水色のリボンで止めている。そんな彼女は・・・

校内1の遅刻魔で有名。

「無理して起きたら死んじゃうもん〜」

が、口癖の基本ワガママっ子だが、何故か校内にファンクラブもあるほど人気度は高い。ついでに言うところ・・・非常に疑り深い子で、何か気になる事があれば

「ない・・・絶対とは言えないから・・・」

意地悪な悪霊さんに、ダメされてるから・・・はわわ・・・」

とにかく疑えるものは疑ってかかる。【これは疑えないだろう】って事に関しては【悪霊】が登場する事になるらしいけど・・・ちょっとイタイ子？ その【悪霊】の前では、全てが疑う対象となるらしい。

「疑う事は萌え〜」

未だに理解出来ないが、彼女にとって【疑う】事は【萌え】に繋がららしい。あと正直言っけど・・・

「でもね。デカちゃん・・・

疑ってる自分、すなわち萌え〜の自分だけは・・・

絶対いるのよね〜」

自分の事を【デカちゃん】というのに、ちょっとイラッとくる。とりあえずデカルトちゃんとの紹介はこの辺で。ラッセルちゃんとの紹介は・・・後でね。

・・・。

「今日もデカちゃん、遅刻しちゃいました〜」

「また？ デカ子、出席日数ヤバくね？」

ラッセルちゃんは、デカルトちゃんのことを【デカ子】と言う。

「・・・」

「そうなんです。」

デカちゃん、出席日数微妙なんです。」

はわわ……」

1つ確かな事がある。

デカルトちゃんは犯人じゃない。手紙の主は私より早く登校し、ルブラン君の靴箱にラブレターを入れている。

あれ？ でも待つてよ……？」

「デカルトちゃんさ。今日の朝……学校来てなかった？」

「はわ？ 無理して起きたら死んじゃうもん。」

出た。

「今日もデカちゃん。超遅刻です……！」

いや、そこで胸を張られても。

「でも私……」

朝、靴箱のところでカントちゃんが言ったの、聞いたわ……

【こんな朝早く、珍しいわね。デカちゃん】って……」

確か……そう言ってたわよね？

「デカちゃん、今日起きたの・・・12時ちょうどです。学校来たのは、お昼の2時ですから」

今、3時過ぎだけど・・・何しに学校来たんだ、この子？

「あのさ・・・僕の推理が正しければ・・・」

ラッセルちゃんは、自分自身の事を【僕】と言う。

「多分、僕と同じクラスのハイデガーちゃんの事だと思っよ。彼女、【デガちゃん】って呼ばれてるし」

なるほど。

「そうか・・・私の聞き間違えね。

デカちゃんじゃなくて、デガちゃんだったのね・・・」

まあおかげで・・・

朝が苦手なデカルトちゃんは、真っ先に犯人候補から除外された。

一方、ラッセルちゃんは・・・

「さあ、今日は昨日の続き・・・僕が集合論の基礎、教えるからね」

あの手紙の主の可能性はあるのだろうか？

・・・。

では、ここでラッセルちゃんを紹介。

何を隠そう、数学倶楽部の部長。ミニスカ+ヘソ出しルック・・・ちよつと時代遅れな感はあるが、ツインテールの元気な女の子。かの天才アインシュタインちゃんとも仲が良く、校内でも随一と言われるほど豊富な知識を持っている。

部長は集合論を研究してるらしく・・・ここ最近の数学倶楽部では、毎日部員相手に集合の話をしてきている。もつともそれを聞くのは、私とデカルトちゃんの2人だけ。あとは幽霊部員だし。

いっけんしつかりものの部長だが・・・まあ、その本性は次のエピソードで解る事になるでしょう。

・・・。

「はわわ〜 昨日の【空集合】は難しかったです〜」

「集合論はロジックとも密接につながってるんだから。

デカ子、論理的に【神の存在】を証明したいんでしょ？

「じゃ〜、ちゃんと学ばなきゃダメよね〜」

集合論を学ぶ事は、哲学を学ぶ上でとても大事だと部長は言う。私達にゲーデルちゃんの【不完全性定理】まで教えると言っているんだけど・・・正直難しいのよね、集合論。でもこれらを学ぶ事は、哲学的にも大きな意義があるんだって。

私は哲学者として成長したいから・・・難しくても頑張って勉強す

る！

ちなみにこの【集合論】は数学の世界でも割と新しい研究分野らしく、聖フィロソフィー学園の中でも【現代組】の子達しか学んでいない。

果たして【古代組】の私と、【近代組】のデカルトちゃんに理解出来るのかしら？

昨日の部長の講義で、【部分集合】と【空集合】について学んだ私達。

「昨日習った・・・」

【空集合は、全ての集合の部分集合になる】。

私も、そこがよくわからなかったわ」

空集合というのは、中身が空っぽの集合の事なんだけど・・・そんな集合考えて、意味あるのかしら？

まず【 x が集合 A に属する】 x は集合 B に属する【が成り立つとき、 A は B の部分集合という。

例えば、

$A = \{1, 2, 3, 6\}$

$B = \{1, 2, 3, 4, 6, 12\}$

という2つの集合の場合、 x が A に属している(この場合、 x は1, 2, 3, 6のどれかになる)ならば、その x は B に属している。だから、 A は B の部分集合なのだ。

「それはわかるんだけど・・・」

【空集合は、全ての集合の部分集合になる】と部長は言う。

「だったら・・・」

【 x が空集合に属するならば、 x は全ての集合にも属する】・・・

それが成り立って事よね？」

「そだよ」

即答する部長。

「でも、空集合って・・・中身空っぽなんだからさ・・・」

x が空集合に属するって・・・おかしくない？」

「デカちゃんも、そこ・・・よく、わからなかったです」

「OK。じゃあ、今日は集合とからめて、論理の基礎を教えよう」

私達はテーブルの周りに座った。

「まずは・・・」

【デカ子がテストで100点とったならば、僕がケーキおごる】

って、命題あったとするわよ？」

命題というのは【正しい】か【正しくない】かが、ハッキリとしている文章や数式の事。

あらゆる真理探求命題の真偽を議論するのも哲学の1つ。例えば命題【神はいる】とかね。

あ！勘違いしないでよ。命題【神はいる】ってのは【神がいる】事を、必ずしも言ってるわけじゃないの。命題ってのは【正しくない】とハッキリわかってる事に対しても言っんだ。だから【2+3=100】のように、完璧間違っている事も立派な命題なのだ。

一応私達の認識では【神はいる】か【神はいない】かの2択でしょ？
なので神がいても、いなくても・・・【神はいる】は命題の1つなの。
の。

【デカ子がテストで100点とったならば、僕がケーキおごる】

部長は紙にその命題を書き、テーブルの真ん中に置く。

「デカちゃん、ケーキ、大好きです」

「いや、例えだから・・・で？ 部長、続きを」

「ケース1。」

デカ子が100点とった。そして僕がケーキおごった。

この時この命題は・・・正しい？ 正しくない？

「それは正しいです〜 100点とつたんだから〜
デカちゃんがケーキごちそうになるのは、当然です〜」

「ま・・・ 疑う余地はない。正しい」

「正解。じゃあ、ケース2。」

デカ子が100点とつたのに・・・僕がケーキをおごらなかった。

「この場合、この命題は正しい?」

「それは間違ってます〜」

「うん。100点とつたらケーキおごるんだから・・・

100点とつたのに、おごらないのはおかしい!!」

だからこの時、命題は・・・正しくない!!」

「OK! ではケース3。」

デカ子が100点とらなかったので・・・僕はケーキをおごらなかった。

「この時、命題は正しい?」

「正しいです〜」

「うん、私も正しいと思う。」

100点取れてないから・・・ケーキもらえないのは当然」

「よし! 今のトコ、全て正解・・・ではラスト! ケース4!

デカ子が100点とれなかったのに……僕はケーキをおごった。

この時、命題は正しい？ 正しくない？」

「これは……正しくないです」

「私も正しくないと思う」

ガラリ！！

その時……部室に入ってくる人物がいた。見覚えのない顔……誰？

「ラ……ラマヌジャンちゃん！？」

部長が裏返った声をあげる。ラマヌジャンちゃん？

「あら……ラッセルちゃん」

名前、聞いたことある。確か部長と同じ、【現代組】の子だ。肩まで伸びた真っ黒な黒髪と、大きなクリツとした黒い目。見た目からして、インド出身だろう。何となく、神秘的な魅力がある。

「な……何故、ここへ？」

そして数学倶楽部の……幽霊部員の1人でもある。

「ただ……私の本を取りに来ただけ……」

【デカ子がテストで100点とったならば、僕がケーキおごる】

「……………」

ラマヌジャンちゃんが、部長の書いた命題をじつと見つめた。

「あ、デカルトちゃんが100点取らなかった時にね……」

部長がケーキをおごったら……この命題は正しいかって話をしたの。

私とデカルトちゃんは、正しくないって思うんだけど……」

「絶対正しくないです」

命題は正しくないという私とデカルトちゃんに対し……ラマヌジャンちゃんは、首を横に振ってこう告げた。

「それ……正しいわよ……」

「え？ 嘘……」

「はわ？」

思わず声をあげる私達。

「何で……？ 100点取ったらケーキおごってもらえるなら……」

100点取らなかつたら、おごってもらえないでしょ？

なんでこの命題が……その時、正しいって言えるの？」

「わかるの。ナマギーリ女神のおかげで・・・」

「え？」

「はわ？」

そう言うとラマヌジャンちゃんは、ニッコリと優しい笑顔を見せる。

いや・・・笑顔はステキだけど・・・な、何？ナマギーリが何と
かって？

部屋の奥の方へ行つたラマヌジャンちゃんは、数冊の本を手に取り
と・・・

「それじゃ・・・私はこれで・・・」

そのまま笑顔で、部屋を出て行つた。

「・・・」

「はわわ・・・」

彼女が出て行く姿を呆然と見つめていた私達。

「なんだか・・・不思議な子ね・・・」

閉じた扉を見ながら、私は呟いた。

「まあ・・・天才と何とかは、紙一重らしいからね。僕にもあの子は・・・イマイチわかんないだね。」

そう言えば、ラマヌジャンちゃんは・・・かなりの天才肌だった聞いた事ある。

「はわわ〜でも、ホントにラマヌジャンちゃんの言う通り〜デカちゃん100点とらなかつたのに、ケーキをおごってもらって・・・」

この命題が正しい事になるんですか〜？

「私も・・・信じられない・・・」

半信半疑の私達に、部長はきつぱりと言う。

「うん。正しい」

え！？ ホントに！？

「論理の世界では正しいんだ。こう考えるといい。」

例えばデカ子が99点取った。そこで僕はこう言う。

【100点じゃないが、よく頑張った！ だからケーキをおごろうー！】

どう？ そういう成り行き、割と自然じゃない？

「自然です〜 ケーキ、欲しいです〜」

「うーん・・・それは自然に思えるけど・・・」

「いい？」

【デカ子がテストで100点とったならば・・・】という命題。

これは100点をとった時の事を言ってるだけで・・・」

「うん・・・」

「100点を取れなかった時の事は一切言っていない。
デカ子が100点取れなかった時・・・」

僕がケーキおごっても、この命題を否定している事にはならない
の」

「なるほどです〜 デカちゃん、わかったです〜」

「・・・」

デカルトちゃんは納得してるようだけど・・・私は・・・

「結論。【pならばq】という命題を考える場合・・・
前提pが正しくないとき、qが正しくても正しくなくても・・・」

命題【pならばq】は、正しい事になるのよー！」

p | q | p | q

T | T | T

T | F | F

F—T—
T—T—
F—F—
T—T—

部長はこんな表を書いた。

「これ、真^{しんじつ}値表^{ちひょう}って言うんだ。

Tは【TRUTH】で、【真】って意味ね」

「デカちゃんのバッグにも、【TRUTH】って書かれています」

「そうそう。まさにそれ！ 【真実】とか【正しい】って意味。

Fは【FALSE】。もちろん【偽】【正しくない】って意味ね」

「うーん・・・」

しかめっ面の私。

「はわわ〜。確かに【p】が【偽】の時、【p q】は2つとも【真】です」

「だから

【xが空集合に属するならば、xはどの集合にも属する】ってのはさ・・・

前提の【xが空集合に属する】がすでに間違ってるから・・・

この命題自体は正しい事になる！」

「むむむ・・・」

まだ微妙な理解の私。

「ゆえに【空集合は全ての集合の部分集合である】ってわけ！
ん〜。Q・E・D・ね」

「デカちゃん、わかったです〜」

「う、うん……」

論理は難しい。

「ううして……」

この日の部長による【集合論講義】は終わった。何となく解ったよ
うな、解らなかつたような……

「ピタ子さあ、今日もブラジャーつけてるよね？」

講義を終えた部長が、私に声をかけてきた。

「え？」

さっきも言ったけど、私の事を【ピタ子】と呼ぶんだけど……

「デカ子のブラジャーは認めるけどさ〜」

デカルトちゃんは【デカ子】と呼ぶわけで。

「……」

つい、自分の胸を覗き込んだ私。明らかに……

胸の大きさを【デカ子】【ピタ子】と呼んでいる。失礼な！

ここだけの話、ラッセルちゃんの胸は・・・
ペタンコだ。

「僕、思うんだけどさ。ピタ子に・・・ブラ、必要ないよ？」

胸がつるぺたで、自分を【僕】と称するので・・・時々、男の子に間違えられる部長。本人は男の子と間違えられる事をすごく嫌うので、そこをイジったりはしないんだけど・・・

「あのね、部長。前も言ったけど・・・
私・・・こう見えても、Bはあるんだから・・・」

思わずそう言ってしまった私。だってラッセルちゃんよりは胸あるのよ！これは真実！！

「こう見えても？ 見えてないけど？」

出た。この言い方は彼女の作戦の1つ。

「ぐ・・・ だ、だからそれは・・・ 例えであって・・・」
わかってはいるんだけど・・・

「ピタ子、【見えても】と仮定しているのに・・・
見せないって事？」

いつも、ラッセルちゃんの術中にハマってしまっ私。

「そ．．．それは．．． そうよ．．．」

「見せないんならさ．．．」

【ごう見えても、私はHカップ】とでも言えるじゃん!」

なんていうか．．． 人の揚げ足をとるのが絶妙なよ、部長は。

「そ．．． そりゃ、そうだけど．．．」

「つまり本当はAでも、Hだと言う事が出来る．．．
見せないこと前提なら．．． 何でもありじゃん!」

「う．．．」

言い返せない私。後で知る事になるんだけど．．．これは昔の哲学者の常套手段、【詭弁きへん】というものらしい。

「結局はさ。ブラを脱ごうとしないってわけよね?」

「う．．．」

始まった。

ラッセルちゃんは．．．1年前、通称【ブラパラ事件】を起こした張本人。いわゆる【ブラジャー・パッドックス事件】。この事件は、彼女の集合論的パッドックスの追求による結果起きたらしいんだけど．．．

説明すると話が長くなるので、この事件の詳細は【番外編？】に預ける。

「きよ、今日はスポーツブラだから・・・」

「え〜・・・ハズし甲斐ない〜。なっせる〜」

なっせる？

明らかにテンション下がった部長はちよつと落ち込んだ後、私を見た。いや・・・私の胸を見た。

「じゃあ、スポブラの先に豆つけたら？」

おっぱい、大きく見えてセクシーになるよ！」

私が豆、大嫌いなのを知ってて言ってる。ここでカッとなったら、またさっきの繰り返しだ。

「豆つけたら・・・ラッセル、ラッセル〜」

とにかく彼女は下ネタが大好き。あと、オヤジギャグも。てか、中身はただの【エロセクハラ中年オヤジ】だと断言していい。

数学や哲学やってる時は超真面目なんだけどな〜。

「・・・」

私は思う。このエロオヤジが、あんなセンスのいいラブレターを書いたなんて・・・まず、ありえない。そうとなれば・・・

「ねえ。あなた達……」

私はテーブルの上に……

「ちょっとコレ……見てくれる？」

あのラブレターを置いた。ひと癖もふた癖もある連中だが……

「はわ？」

「何？」

この数学倶楽部で、数少ない毎日顔を見せる部員。

「コレ、誰が書いたか……わかるかな？」

そして、頭はキレる子達だ。

「はわ？ ラブレター？ いやいや……」

これがラブレターとは……簡単には信じないです〜

何かの罰ゲームの可能性もあります〜……」

私は中から便せんを取り出し……それも広げて見せた。

~~~~~  
愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。

もっとあなたの……近傍きんぽうに入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・  
限りなく近付いていきます。

メールアドレスを教えてください・・・  
毎日メーラー展開します

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。  
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時13分でどうでしょう？  
私、1分前にはいておきますから。

それじゃ、放課後・・・  
お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P.S.  
あなたにとって、私が十分である必要はないけれど・・・  
あなたにとって必要になれば、私は十分です。

~~~~~  
「有界名閉集合にして、この文章センス・・・」

「部長、何言ってるの？」

「コンパクトなのにセンスがいいって言うてるの！
まあ、僕ほどじゃないけどね」

「.....」

部長のギャグには、センスのかけらもない。

「玄関の前で、コレ落ちてるの見つけてさ……」

私は嘘をつく。愛のためなら、嘘だって平気。

「落とし主に、返してあげたいんだけど……」

これも嘘。私以外に誰がルブラン君を狙ってるから知りたいだけ。

「だからコレ……誰が書いたと思う？」

こうして……数学倶楽部に所属する私・ピタゴラスと……

「デカちゃん的には、まずは部員、全員を疑ってみる！
手紙の主は……」

あなたよ！Pちゃん！」

朝が弱く、疑り深いデカルトちゃん。そして……

「僕が犯人？ ち！バレちゃくしょうがない……
どうせ有罪は確定だ。それならば……」

お前のブラを頂く！」

私のド下手な物真似をする部長。すなわちエロオヤジのラッセルちゃん
の3人で……

「おら！ デカ子！ 僕にお豆を見せなさい」

「はわわ〜（笑）」

このラブレターの主を探し出し・・・

「あまいわ！ ラッセルちゃん！

デカちゃんが、女の子と信じているようだけど・・・

果たして真実かしら!？」

そしてその子が【犯人】である事を証明するため・・・

「そんなの・・・ブラを頂けば、解ること!」

「それはどうかしら!？ 仮におっぱいがあったとしても・・・
意地悪な亡霊さんに、ダメされてないかしら!？」

動き始めた・・・

のか？

(第5話へ続く)

第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん（後書き）

~~~~~

次回予告

1年前に起こった、【ブラジャー・パラドックス事件】。

これはラッセルちゃんの、集合論的パラドックスを追求する事がきつかけで起こった。最初の犠牲者はカントールちゃん。

そして・・・

次回 「番外編？ ブラジャー・パラドックス事件」



番外編？      ブラジャー・パラドックス事件（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

~~~~~  
番外編？      ブラジャー・パラドックス事件

番外編？ ブラジャー・パラドックス事件

今から約1年前・・・

その事件は起こった。

【現代組】所属のラッセルちゃん。昔から自分より胸が大きい子を見ると、ブラジャーをハズしたくなる衝動に駆られる子だった（これは本人も認めている）。

ある日彼女は

【自ら<sup>みずか</sup>ブラを脱ごうとしない子から、強引にブラをはぎ取る僕】

の存在について考えてみたらしい。そして、本人曰く

「僕も【自らブラを脱ごうとしない子の集合】に属している」

との事。そうすると、どついう事が起こるか？

「僕はブラを脱ごうとしない女の子から、強引にブラをはぎ取るから・・・」

自らブラを脱ごうとしない僕自身の、ブラもはぎ取らなければいけない。

でも、そうすると・・・自らブラを脱いでいる事になってしまい・

まさにパラドキシカル！！」

自己存在のパラドックスに直面した彼女は興奮し、あるうことが・

・  
【自ら<sup>みずか</sup>ブラを脱ごうとしない子から、強引にブラをはぎ取る僕】

を【実践】する事を決意。本人曰く、それも立派な哲学的実践だと  
・・・？

とはいえ、そのためにやるべき事といえば・・・

明<sup>あき</sup>かた<sup>ひ</sup>だ。

最初の犠牲者は、同じクラスのカントールちゃんだった。ラッセル  
ちゃんは彼女に・・・

「ねえ、ブラとって」

と言った。

「は？ 何言ってるの？ 嫌に決まってるじゃん!」

というカントールちゃんの返しに……

「ふ…… 自らブラを脱ごうとしないわけね……」

ニヤリと笑ったラッセルちゃん。カントールちゃんの背中に忍び寄  
り……

「3-1」

彼女のブラホックを、一瞬でハズしたかと思うと・・・

「2!」

まるでマジックのように、ブラジャーをはぎ取った。

「1!」

目撃者の証言によると、ラッセルちゃんは奪い取ったブラを高々と持ち上げ・・・

「ラッセル、ラッセル」

と、勝利の雄叫びをあげていたそうだ。

「これで私は、パラドキシカル！ ラッセル、ラッセル」

ついでに彼女は・・・どんなブラも、3ステップでハズせると豪語している。そんなスキル、人生で有用か？

こうして・・・

彼女自身、パラドキシカルな存在になりたいがため・・・

クラス中の女の子を巻き込んだ【ブラジャー・パラドックス事件】、通称【ブラパラ事件】が勃発。

この事態を収拾しようと動いたのが、同じクラスの学級委員長・ヒルベルトちゃん。

「は？ ブラはずせ？ あなた、気は確か？」

そんなクラスの秩序を乱す生徒の言う事が聞けるとでも？」

矛盾のない完全なクラス体系システム作りを目指していた彼女も・・・

「自らブラをハズす気・・・無いわけね・・・」

「当たり前でしょ！ 完全な・・・」

「3！ 2！ 1！」

言わずもがな。2人目の犠牲者となった。

「ラッセル ラッセル」

そしてクラスの女子達は、次々とラッセルちゃんの毒牙にかかる。

「ブラとって！」

の要求に対し

「いやー」

と言う女子のブラをはぎとっては

「ラッセル ラッセル」

勝利宣言と同時に、ブラを高々と持ち上げる。パラドックス以前に、もはやただの変態だ。

「ブラとって！」

このラッセルちゃんの理不尽な要求に……

「いいわよ」

唯一「Yes」と言ったのが、ラマヌジャンちゃん。彼女……論理は通じないが、超のつく天才肌で、あらゆる公式を見つけるのが得意な子らしい（ラッセルちゃん情報）。

「じゃあ、取るね」

というラマヌジャンちゃんに対し

「あ！ 待って！ いい！ あんたじゃ、パラドキシカルに反する  
！！！」

初めてうるたえたラッセルちゃん。矛盾に反するというのも、変な話だけど？

こうして……

ラマヌジャンちゃんを除く【現代組】の女子全て……ラッセルちゃんの犠牲になった。

「ラッセル ラッセル」

やがて【現代組】の女の子達だけでは飽きたらず……他のクラスの女の子を標的にし始める。

・ 【古代組】に侵入したこのテロリスト・・・いや、エロリストは・・・

私とあいたい相対した。

「・・・」

ラッセルちゃんは私の胸をじっと見つめた後、こう言った。

「ブラ、必要？」

これがラッセルちゃんにかけられた、最初の言葉。

「は！？ Cあるから！！」

そしてこれが私からラッセルちゃんにかけた、最初の言葉。

「C？」

「あ・・・ホントは、B・・・プラス・・・」

Bプラスよ！ 四捨五入してCよ！！」

「Bプラス？ それ以前にさ・・・ おっぱいに、四捨五入ってあるの？」

言うなれば、四捨五乳ってか？ ラッセル、ラッセル」

（ 「な、何よ・・・ この子？ 人のおっぱいをネタにして・・・」

ラッセルちゃんの目がキラリンと光ったかと思うと・・・

「ぶっちゃけ言っけどさ・・・ Aでしょ？」

自信満々でそう言ってきた。

「は!?! Bあるし!?!」

「じゃあ、ブラとってよ・・・」

「はあ!?! 頭おかしいんじゃないの？  
なんで、ブラとる必要があるわけ？」

「ふむ・・・じゃあ、あなた・・・」

この当時はお互い名前も知らない。

「自ら、ブラを取ろうとしないわけね？」

「あ・・・当たり前でしょ!?!」

あんだだって、ブラ取りなさいって言われたら・・・

取らないでしょ!?!」

「うん」

あの時の嬉しそうなラッセルちゃんの顔は・・・忘れたくても忘れられない。嫌な意味でね。

「3・・・」



「？」

ラッセルちゃんは、突如・・・

「2・・・」

カウントダウンを始めたかと思うと、私の背後に忍び寄り・・・

「1！ ラッセル ラッセル」

瞬殺でブラホックをはずし、ブラジャーをはぎ取った。

「き・・・ きゃー！！」

この後、どうなったかって？

私の口から言いたくないし、言えるわけがない。それは読者の想像に任せる事にしておく。

・・・。。。

事件から数日後。私は数学倶楽部に入部するため、部室を訪れた。

そこでラッセルちゃんと再会する。

「お？ 古代組の・・・ えっと・・・」

彼女は私の胸を見て、何かを思い出した。

「そうだ！ ピタ子！ 【古代組】のピタ子だ！！」

正真正銘のピタ子だ！」

いや・・・ そんなピタ子ピタ子、言わなくても・・・

「・・・」

あんだだつて、胸ピッタコンじゃん。私は失礼かなと思って、触れないでいるのに。

「すでに証明済みだもんね。ラッセル ラッセル」

このセリフから、ブラをハズされた後の事を・・・少し想像できるだろう。

前述したけど、ラッセルちゃんはつるぺたぴったんこ・・・学校1の貧乳だ。

【自分より胸が大きい子のブラをハズす】 【学校1の貧乳】 〃 【無差別エロ】

【 】は、【 】かつと読む。

この命題における等式は、【現代組】で【ラッセルの法則】とよばれている。【ド・モルガンの法則】よりも明かで、本人以外周知の公式なんだつて。まあ、集合論は【現代組】しか習っていないから、

私にはあまりわからないけど。

そんなつるぺたびったんこのラッセルちゃんに……

「ラッセルちゃんこそ、間違いなくブラいらないから」

なんて言おうものなら……

「あなたこそ、ブラ、必要なの？」

となり、あの事件の繰り返しになってしまふ。そんなラッセルちゃんか……

数学倶楽部の部長だったのには驚いた。

「僕、集合好きだから」

意味不明な動機で、自ら部長に立候補したらしい。基本、数学倶楽部の人間は……自分にしか興味が無い。倶楽部会議で集合に興味あるという彼女以外、立候補する人も推薦される人もいなかったらしい。

「じゃ。僕、部長ね　ラッセル、ラッセル」

こうして我が聖フィロソフィー学園、数学倶楽部の部長に……

「集合に必要なのは……エレメント！

ん、何かエロい【ひ】【び】【き】！」

エロオヤジが就任したというわけだ。

人のブラをハズすのが趣味・・・そんな子が上の立場に立つなんて、  
どんな混乱を招くだろう。

そう思っていた私だが・・・

現代組のラッセルちゃん。彼女こそ部長にふさわしい・・・

だんだんそう思うようになってくるから不思議。それはこの小説を  
読んでもらえれば・・・みんなわかってくれるだろう。

そしてもう一つ。

後に私は・・・

このラッセルちゃんの【驚くべき事実】を知る事になる。

(第5話へ続く)

番外編？ ブラジャー・パラドックス事件（後書き）

~~~~~  
次回予告

私達3人は、【from】を見つめながら議論する。

この記号、部長は円周率だといっただけど・・・？

まさか・・・？

次回 「 第5話 パイからの手紙 」

~~~~~

## 第5話　パイからの手紙（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

~~~~~

## 第5話　パイからの手紙

~~~~~

第5話 パイからの手紙

「やっぱり……まず、コレからよね」

ラブレターを裏返す私。

【from】

「これ……フロム何？ 何かの記号？」

私の質問に、2人は即答してくれた。

「はい！ デカちゃん、わかります〜！

これは円周率のパイです〜！」

「そうそう。おっぱいの【】（パイ）ね」

とりあえず部長は無視したいが……

「パイ？ パイって、【】じゃなかったっけ？」

「それ小文字よ。大文字で【】って書くの。

ピタ子……ホント、無理数とか苦手よね〜」

現代組の部長の知識は、犯人捜索に欠かせない。

「仕方ないでしょ！ 【古代組】では無理数、教わらないんだから！」

「そういえばピタ子。無理数の質問してきた、教団の弟子・・・半殺しにしたってホント？ すっごい噂になってたよ？」

「あ！ その話！ デカちゃんのクラスでも話題なっていました」

「・・・」

「いくら自分が無理数わからないからってさ。

弟子を半殺しにするってのは・・・僕はどうかと・・・」

「あ、あれは私じゃない！ 私のとりまきが勝手に・・・

【禁忌タブーに触れし者、制裁あれ】とか言ってるさ・・・

その子を校庭裏の川に投げ込んだのよ。

私は一切、関与してないから！」

ここで【ピタゴラス教団】について説明しておこう。いわゆる私のファンクラブで、何故か私は【教祖様】と呼ばれている。そしてファン連中は自らを【弟子】と称し、ぶっちゃけストーリーカー並に盲信というか、妄信するコアな連中が多い。

デカルトちゃんのファンクラブとは違い・・・私の教団は一歩間違えれば、犯罪者になりそうな子ばかり。【万物は数なり】【ピタゴラスの定理】【豆禁】が教団の3大キャッチコピーになっているらしい（私は関知していない）。

弟子になって日の浅い子は・・・熱心なのはいいけど、私が苦手な無理数に関する質問をする時がある。そんな時、これまた熱心な先輩弟子が・・・質問した子を校庭裏の川に投げ込むのが慣例だ。

先にも言ったが、私は豆が大嫌い。死ぬほど嫌い。死ねばいいのに。

そんな私に、新人弟子が【納豆】を差し入れた事があった。

「僕が聞いた話じゃ、納豆差し入れた子をさ・・・半殺しどころか、全殺しにしたって聞いたわよ」

「・・・」

ノーコメント。

「豆、体にもよくて美味しいのに」。

「デカちゃん、豆、好きだけどな」

「僕もお豆、大好き」

部長が言うと、エロにしか聞こえない。

【 f r o m 】

「話を戻しましょう。じゃあ、これは・・・パイからの手紙？」
はなし

「ん・・・僕には、インターセクションに見えるな」

「インターセクション？」

「そ。2つの集合の共通部分。交わりつて事。

僕、一昨日教えたじゃん。

ホントは【U】をひっくり返した感じなんだけど・・・」

うん。【U】を逆さまにして【】か。まあ、見えなくはない。

「デカちゃん。共通部分の事、忘れたです」

「教えたばかりなのに・・・デカ子、もう忘れた？」

ここ最近、部長が講義してくれている【集合論】。一昨日は【共通部分】と【和集合】の話も出た。

例えば、

$$A = \{2, 3, 5, 7\}$$

$$B = \{1, 3, 5, 7, 9\}$$

という2つの集合があった場合、どちらの集合にも属する要素の集合を、AとBの【インターセクション共通部分】といい、A ∩ Bで表す。

$$A \cap B = \{3, 5, 7\}$$

つてわけ。ちなみにどちらかに属している要素を集めた集合は【ユニオン和集合】といい、A ∪ Bで表す。

$$A \cup B = \{1, 2, 3, 5, 7, 9\}$$

というわけだ。部長曰く、集合論で【共通部分】【和集合】は基本中の基本との事。

「インターセクションか・・・」

ルブラン君と、交わりたいてって意味じゃね？」

部長のエロトークはおいといて・・・

「顧問に聞いてみようかな？」

顧問なら部員のことをよくわかるはず。このラブレター見せたら、一発で手紙の主を特定してくれるはず。我ながらいいアイディア。早速・・・

「デカちゃん、思っんですけど」

顧問に頼るのは、多分ダメです」

ところがデカルトちゃん、私の意見にダメだしする。

「顧問のパスカルちゃんは」

学校終わったらすぐパチンコ屋行くです」

パチンコ屋？

「そういえば僕、日曜日にパスカルちゃん見たよ。

赤鉛筆耳にかけて、競馬新聞を凝視してた」

競馬？

「その新聞の裏側にさ・・・裸の女の人も載ってて興奮したわ」

ラッセル、ラッセル」

「デカちゃんの担任ですけど・・・」

そう。数学倶楽部顧問のパスカルちゃんは、【近代組】の担任でも

ある。

「放課後〱担任、見かけた事無いです〱」

「でも授業だけは上手よね、あの先生。

僕、確率論の授業受けた時さ・・・

わかりやすくて、けっこう感動したわ」

「ええ？ デカちゃん、しょっちゅう怒られるです〱。

【お前、空しいよな】 【お前の哲学、浅いんだよ】 って〱・・・」

「【古代組】の授業では、なんか変な事言ってたな〱。

【結婚〱殺人】が成り立つとか・・・」

「あー！ それ、言ってた！ 僕も聞いた！」

井戸端会議になりかけたが、話を総合すると・・・どうやらは顧問はギャンブル好きらしく、授業が終わるとすぐにパチンコ屋が競馬場に出向くらしい。

「ふむ。パスカルちゃんに頼る作戦は・・・ 無しね」

「無しです〱！」

「ナツセル！」

なっせる？ こうして顧問経由の犯人搜索は、全会一致で否決された。

「どつやって手紙の主を見つければ・・・
他に何か手がかりないかしら・・・？」

部長が手を挙げた。

「容疑者の人数は、有限なんだからさ。」
しらみつぶしに、部員全員あたればいいんじゃない？

【あなた、ラブレター落としませんでした？】ってさ」

自信満々で言いあげたものの・・・

「でもほとんどの部員・・・学校終わったら、散らばるのよね」

部室に顔出すのは、私達3人ぐらい。他の部員は、基本幽霊。たまに顔見せても、すぐどっか行っちゃう。

「うーん、確かに。僕達は、毎日ここ来るけど・・・
帰宅部員を始め、他の部員がどこにいるか把握できないな」

かといって、休み時間に各クラス回るのも・・・

「【古代組】 【中世組】 【近代組】 【現代組】 【東洋組】 の5クラス。
ス。

部員は、全てのクラスに散らばってるし。

1つ1つ回るのも、けつこつめんどくさいわよっ。」

「デカちゃん、めんどくさいの嫌いです」

「あ、僕もめんどくさいのダメ。はい、ナッセル！」
なっせる？

「はい！」

今度はデカルトちゃんが手を挙げる。

「はい、どうぞ」

あまり期待せずに、彼女に発言権を与えた。

「5時過ぎにポール公園行けばいいと思います」

「あ……」

「あ……」

部長と同時に声を上げる私。何故、気づかなかったんだろう？
時計を見ると午後4時過ぎ。学校から公園までは、10分もあれば
行ける距離だ。

「デカルトちゃん…… あなたの言う通りだわ。
手紙の主は……」

ポール公園、トイレ近くのベンチに座っているはず……」

「デカ子！ 冴えてるじゃん！」

「ご褒美に……ラッセル、ラッセル」

「きゃ〜!!」

また始まった・・・。

私は2人を部室に残し、部屋を出ようとする。

プチン

「!？」

瞬間、ブラホックがハズれる感覚を味わった。

「ふふ・・・スポーツブラなんて嘘ね。僕にはお見通しさ！」

酔っぱらって気分が高揚すると、キスをしたくなるオヤジがいると聞くが・・・

「【ブラを脱ごうとしない子のブラを、強引にはぎ取る女の子】

この命題のパラドックスに・・・ いざ、挑まん！」

部長は気分が高まると、人様のブラをハズしたくなる・・・結局エロセクハラオヤジってわけだ。

「ラッセル　ラッセル」

「ちよ・・・」

この変態のせいで・・・ 無駄な時間を過ごしたのは言うまでもない。

(第6話へ続く)

第5話 パイからの手紙（後書き）

~~~~~

次回予告

部室を出た私。思いがけず何者かとぶつかった。

目の前にいたのは・・・部長と同じ【現代組】のソーカルちゃん。

不思議な服装の彼女は、突然意味不明な事を言ってきた。

次回 「 第6話    ソーカルちゃんと理事長 」

~~~~~

第6話 ソーカルちゃんと理事長（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に行こうとするのだが・・・？

~~~~~  
第6話 ソーカルちゃんと理事長

第6話 ソーカルちゃんと理事長

ボタン！！

「あ……」

部屋を出た私は、出会い頭に誰かとぶつかり……

ドスン

その場で倒れてしまった。

「いてて……」

お尻をさすりながら前を見ると、ぶつかった相手も尻餅をついている。

「2分の1mVの2乗が、帰納的に分子間力によって引き裂かれ……」

「？」

その子の洋服には、色々な数式や化学記号がプリントされていた。

「し、ごめんなさい……」

前を見ず部屋を出た私……明らかに私の不注意でぶつかったので、素直に謝るが……

「ユークリッド空間なら・・・カノンコードで調和がとれるけど・・・
もし、遠近法によるミスディレクションの世界なら・・・？」

その子は、ニヤニヤしながら私に語りかける。

「は？」

首をかしげる私。

「オールの雲の中で見たわ。

垂直落下式・・・クローズドインターバルによるタイムトラベルを・・・」

「ちよ、ちよ・・・あなた、大丈夫？」

絶対、この子・・・

「エントロピーが増大すると、ジュール熱によるガンマ線の波長が・・・」

打ち所が悪かったんだ。

「おろ？ ソーカルちゃん・・・」

私に続いて、部室を出てきた部長。私がぶつかった相手に、手を差し出した。

「・・・」

その子は部長の手を握り、ゆっくりと立ち上がる。

「1/f揺らぎってあるでしょ？」

ベジタリアンの世界じゃ、ヴァンデグラフにG難度なの」

立ち上がると、ニヤニヤの視線をラッセルちゃんに向け……さらに語り始めた。

「ロンゴロンゴ文字で、コックリさんやるとさ……」

4コマ滑りのディアミドフから逆転してヒーリーを得られるから

「！」

「はいはい。わかった、わかった……」

ラッセルちゃんは、その子の背中を押し……

「相対性理論も、アウトオブプレイスアーティファクトも……」

フラクタル音階で、現在完了なの」

「ほら。【物理倶楽部】は、隣……」

隣の部屋へ押し込む。

「私！！ あなたのドッペルゲンガーを見たわ！！」

押し込まれたその子は、私を指さしてそう言った。直後……

「じゃ、また明日ね。ソーカルちゃん」

バタン！

部長が物理倶楽部の扉を閉める。

「ふっ……」

やれやれという表情を浮かべる部長。幸いにも、その子が再び私達の前に現れることはなかった。

「ソーカル……ちゃん？」

「うん。僕と同じクラス。【現代組】のね……」

「デカちゃん、聞いた事あります」

ラッセルちゃんの後ろからひょっこり現れたデカルトちゃん。

「デカちゃんが聞いた話では、早口言葉で専門用語を言って、校内意見発表会で最優秀賞とったんです」。

でも授賞式で【全部嘘ぴょん】って、笑い飛ばしたって聞いてます」

「お？ デカ子、よく知ってるね」。

【ソーカル事件】って、ヤツだね」

「ソーカル……事件？」

「まあ、クラスでもかなり変な子だからさ」。

あまり気にしない方がいいよ。さ、公園行こ」

【現代組】 って所は部長を始め・・・

「うん・・・」

変人の集まりらしい。

「数学倶楽部のメンバーで外へ行くのっつて、初めてかも〜。
デカちゃん、ドキドキです〜」

「お？ ドキドキしてる？ どれどれ・・・
ちよつとブラジャーハズして、お胸を・・・」

「きゃ〜」

また始まった・・・。

「これ！」

不意に男性の透き通るようなテノール声が、私達にかけられた。

「あ・・・」

物理倶楽部の前にたたずむ、スーツ姿のダンディなおじさん。少し
白髪が目立つ巻き毛で、身長は推定185cmと大柄。ネクタイ姿
をビシッと決めた我が聖フィロソフィー学園・・・

「サンジェルマン理事長・・・」

「・・・」

私達3人を睨み付けている。いや・・・私を睨み付けてる？

「廊下で騒がないように。部室に入るか、静かに廊下を歩きなさい」

目つきは鋭いけど、優しい口調で注意する。

「すみません・・・」

頭を下げた私。後ろの2人も、一応頭を下げている。

「仲がいいのは良いことだが・・・」

君達は今朝早くも・・・校舎の屋上ではしゃいでいたね？」

「え？」

「はわ？」

「え〜？」

私達は同時に、疑問の声をあげた。

「僕たち、朝は一緒じゃないですよ？」

「そうですね。デカちゃんは今日、遅刻しました〜！」

いや・・・だからそれ、胸をはって言える事か？ しかも理事長の前で？

「そ、そうですね。私達は今日、倶楽部で初めて顔を合わせました」

「……………」

理事長の眉がっぴりあがる。

「そうか……。失礼。人違いだったようだ。

まあ、とにかく。はしゃぐ時は、場所をわきまえて」

「は、はい！ 失礼します！」

私は横にいた2人の袖を引っ張り、その場から立ち去った。

「僕たち、誰と勘違いされたんだろっね？」

「デカちゃんも気になりますっ」

「……………」

チラッと後ろを見ると……。理事長が、こちらをジッと睨み付けたままだった。

「理事長……」

ロリコンかしら……。？」

女子高生を見つめ続けるって事は、その可能性も否定できないってわけよね？

「わ。理事長、ずっとピタ子見てるよ。

ひょっとして、興味あるんじゃないの？」

部長が私の背中をポンと叩く。

「可能性アリです。だからあんな作り話を言って、気を引いたんです。」

「まさか……。」

再び後ろを振り返ると、彼が物理倶楽部に入っていくのが見えた。

「……。」

確か理事長…… 化学の先生だったはずだけど？ 何故、物理倶楽部へ？

サンジェルマン理事長の事をちょっと気にしながらも……

私達3人は、学校を出ようと1階へ降りていった。

(第7話へ続く)

第6話 ソーカルちゃんと理事長（後書き）

~~~~~

次回予告

外に出ようと、1階の廊下を歩く私達。タレスちゃんやヘラクレイトスちゃん達が、万物の根源についてディスカッションしている所へ遭遇する。

~~~~~

次回 「 第7話 万物の根源^{アルケー} 」

~~~~~

## 第7話 万物の根源（アルケー）（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったたら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に行こうとするのだが・・・？

~~~~~  
第7話 万物の根源<sup>アルケー</sup>

## 第7話 万物の根源（アルケー）

一介の化学教師だったサンジェルマン先生は、ある日偉大な化学の実験に成功した。くわしくは知らないけど、人はそれを【錬金術】と言っただって。そのおかげでサンジェルマン先生は超のつくお金持ちになっただけらしい。

そして私立学校として経営の危機だった聖フィロソフィー学園を立て直すため、理事長に就任したのが数年前。彼のおかげで廃校の危機を免れた本校・・・最近、共学になったのもサンジェルマン理事長の発案だったそう。

まあ私的には、ルブラン君と運命の出会いをしたのだから（遠くから見つめるだけで、喋った事ないんだけどね）・・・サンジェルマン理事長様々って感じよね。

そんな聖フィロソフィー学園・・・通称「テツ学」。放課後の廊下を歩くと、色々な連中と遭遇する。今、私達は玄関に向かうため、1階の【古代組】の前を通っているが・・・

「万物の根源は・・・水ですわ」

「いやいや、火だっぺよ!!」

「原子だっちゃ!」

そこでは毎日、万物の根源・・・すなわちアルケー探しのディスカッションが行われている。

「水はどんな形にもなれるのよ。それに生命の起源は水にあり。もっとも万物の根源にふさわしいのは……水ですわ」

まるでネグリジエのようなスケスケの服装で……おっぱいも大きいタレスちゃん。

「それなら火だって、形を変えられるっぺよ！」

魔法使いのような出で立ちのヘラクレイトスちゃん。

「いやいや。原子アトムの結合次第では、どんな形にもなれるっちゃ……

」  
巫女のように可愛らしい姿のデモクリトスちゃん。万物の根源アルケイについて語りあうこの3人の輪の中に

「デカちゃん的には……全て疑わしい！

つまりあなた達は……」

デカルトちゃんが乱入した。

「あら、デカルトちゃん。今度は私と……勝負するつもり？」

タレスちゃんがけんか腰に言葉を投げつける。

「はわ？」

首をかしげるデカルトちゃん。その横にいたラッセルちゃんと、タレスちゃんの目が合った。

「!?!」

瞬間、タレスちゃんは……両手で胸を抑える。あれ？ ブラジヤ  
ーつけてないよね？

「部長、タレスちゃんのブラ……取った？」

「あのさ、ピタ子。僕が見境無く人のブラ、取ったりするように見える？」

見える。

「タレスちゃん……普段から、ノーブラだったっけ？」

「だから僕、彼女のブラなんか取ってないし」

明らかに警戒心むき出しのタレスちゃんは、部長に声をかける。

「あんた……もう、十分でしょ？ さっさと行きなさいよ……」

「タレスちゃん……部長が苦手みたい。過去、何かあったのだろうか？」

「部長……タレスちゃんを襲ったんじゃないの？」

「まさか。僕がそんな事をするように……」

見える！

「まあ、あの豊満な生乳・・・揉んでみたいけどさ。  
僕にだって理性があるよ」

人のブラはずしくった前科数犯のエロオヤジに・・・理性なんてあるのか？

「いい？ デカちゃん的には」

デカルトちゃんは、3人を交互に指さし・・・

「絶対的な何かを探すには・・・

あなたたち、【萌え】が足りないわ!!」

ドヤ顔で言つてのける。

「あなたの言う【萌え】だって、水じゃないの〜!？」

「いやいや・・・火だっぺお!!」

「だから、<sup>アトム</sup>原子だっちゃ・・・」

彼女たちには通じない。

「我思う、ゆえに我萌え〜！ それだけが唯一の真実!!」

「あ・・・」

熱く語るデカルトちゃんに、背中から声をかける人物がいた。

「あ・・・絶対壊れない・・・アイデアの世界について語らない



「？」

まためんどくさいのが現れた。時間が気になる私はデカルトちゃんの腕を掴み、ディスプレイの輪から引きずり出す。

「プラトンちゃん、ごめんね。」

私達、ちよつと用事があるの。」

ヒラヒラのスカートに三角形のアクセサリーをつけたプラトンちゃん。

「ほら、デカルトちゃん。行くわよ!。」

プラトンちゃんに背を向け

「アイデア・・・。」

「水・・・。」

「火・・・。」

「原子アトム・・・。」

背後に、古代組の白熱ディスプレイを聞きながら・・・

「はわわ〜 萌えです〜。」

後ろ髪引かれるデカルトちゃんの中を押し、私達は靴箱へと向かった。

「僕的にはさ」

ディスカッションを遠目に見守っていた部長が、口を開く。

「デモクリトリスちゃんは、なかなか・・・」

「デモクリトスちゃん!!」

油断するとベクトルが変態の方を向く部長。

「そうそう。デモクリトスちゃんね。

万物の根源が原子アルケイアトム・・・

なかなか確信ついていると思うな」

「・・・」

以前はよく・・・私も、アルケイディスカッションに参加していた。

【万物の根源アルケイは、数である!】

これが私の持論。だけど、私のファンクラブ【ピタゴラス教団】の人以外・・・ほとんどこの意見に耳を貸さないのよね。

「数って何ですか?」

「見えないし! 書かないと見えないし!」

「そんなものが、万物の根源アルケイっちゃ?

「ちゃんちゃらおかしいつちゃつちゃ！」

みな自分の主張こそが正しいと思ってる。まあ、そういう私もそう  
なんだけど……。

「でもピタ子も、なかなかいいセンいつてるよ」

部長は私の意見を褒めてくれる。教団以外の子では、唯一の人物だ。

「聖メンデレーエフ学園の子達と合コンした時さ。

元素は番号がついてる。つまり数字と元素は対応してるのよ」

合コン？

「それに僕たちがいる場所だって、座標系で数値表現できる」

「は〜い！ 座標はデカちゃんが発明しました〜！」

「デカ子の発明は、直交座標。色んな座標系あるけど……

やっぱり最初の座標系を創始したのは偉いね、うん」

部長が言うには……例えば北緯何度、東経何度、高さ何mとかで  
この地球上の【位置】は全て【数字】で表現できるという。さらに  
は、その位置にある物質も全て元素レベルで考える事ができ、それ  
ら元素も数字が対応しているという。

「あとは質量なんかも、全て数値表現できるしね。

この世に存在する物は、数字で表現可能。例え見えなくても……

「

「見えなくても？」

「例えばブラックホール。」

光のみこむわけだから、直接観測されたわけじゃない。

X線など電波の観測数値を元に、位置を特定しているんだ。

つまり数字だけが、見えないブラックホールの存在を主張しているのよ」

部長曰く・・・数字があれば、その物が存在している位置や材質、質量や大きさなど全て表現できる。例えば私達の目で見えなくても、つまり全ての物の存在は、数字に還元できる・・・

「僕は、【全て】とは言っていないよ」

これ以上は【存在論】という哲学の深いところまで発展する事になるので・・・その話はまたいつか。

「だからピタゴラス。万物の根源は数字・・・」

正解とは断言できないけど、いいと思うよ。マジで」

「でも、数字の世界も疑う余地はあるでしょ」

デカルトちゃんの哲学は全てを疑う事から始まる。

「待ってよ、デカルトちゃん。例えば座標系も疑えるって事？」

「もちろんです」

「そんな事言ったら、デカ子。

君が開発したデカルト座標も、正しくないって事になるよ?」

「だからデカちゃん、言ってるじゃない?。」

萌えの私だけが、唯一正しいの!

その私が考えた座標系は正しい・・・はわ?

でもさっき、疑う余地があるって言うちゃったし・・・」

「ほら、パラドックスに陥った」

嬉しそうに部長が言い放つ。

そう・・・

私達は毎日・・・こんな話し合いをしている。

ある者は、物質とは何かについて研究し・・・

ある者は、生きる意義は何かと考える・・・

ある者は、正義とは何かを語り・・・

そしてある者は、知識とは何かを追求する・・・

何も知らないという事さえ、【知】だという人もいる。

「【ムチの血】ってヤツでしょ!」

興奮するね〜 ラッセル〜 ラッセル〜

「違います。【無知の知】です。！」

「……………」

「おろ？ いつも真っ先にツッコミ入れるのはピタ子なのに……  
放置プレイ？」

「いや……私も1つ、【知】を得たわ」

「何です？？」

「【ベタなエロオヤジギャグは、殺意を芽生えさせる】」

「あゝ。僕もそれ、わかる！！ すっごい、よくわかる！」

こいつはわかってない。

「……………」

部長の邪魔が入っちゃった。話を戻そう。

私達【人】はどこから来て、どこへ向かっているのか……

その存在意義とは何か？

何故、私達は感情があるのか？ 愛とは何か？ 生きるとは？

それらについて考える事は全て【哲学】の対象だ。

そして多くの哲学者は・・・それら思考の先にある、大きなテーマにぶちあたる事になる。

それは・・・【神の存在】。

【現代組】では【大統一理論】や【ビッグバン】、【インフレーション理論】や【超ひも理論】など、最新の科学や数学を学んでいるらしいが・・・

実のところ、それらの根本は不確実なのである。

結局行きつく先は、それら全ての源<sup>みなもと</sup>。おそらく【絶対的な何か】・・・多くの人はそれを【神】と表現する。そしてその存在を認めなければならぬのかという議論になる。

【神】の定義とは何か？ 【神】の存在をどう証明するのか？ そもそもこの世の起源は【神】でしか語れないのか？

現代組の天才児と言われるニーチエちゃんは

【神。お前はもう、死んでいる】

という言葉で、一躍時<sup>いちやく</sup>の人になった。これは【神は存在していたが、すでに死んだ】という意味ではない。彼女の言う【神】とは、絶対的な象徴・・・例えば【神】もそうだが、【真理】や【善】などもそれにあたる。それらはもはや無価値である・・・という彼女の主張を表したのが、上の言葉だ。

しかし彼女とて・・・

神が存在しない事を証明したわけではない。

この先、万人が納得する【答】が見つかるのかどうか・・・今のこと、誰にもわからない。

「・・・」

今の私はそれよりも・・・

「さ。ようやく学園の外に出たわ。

ポール公園に向かうわよ」

ライバル  
恋敵が誰なのか・・・それにしか興味が無い。そして無価値かもしれない【愛】のため・・・

その子の前に立ちはだかってやる。

「公園、見えてきました」

「青空教室つても、アリだわ。

部長として週一ぐらい、公園で部活つても考えようかな」

「・・・」

もうすぐ目的地に到着する私達。

・・・。



ちょうどその頃。

理事長室では、私達の想像を超えた【物】が運ばれていた。

「じゃ、ここにサインお願いします」

「・・・」

サンジェルマン理事長は、無言で宅配業者の差し出した用紙にサインする。

「では、失礼します」

業者が部屋を出ると・・・目の前にある、段ボールを見つめた。  
1辺約1・5mの、大きな立方体の段ボールだ。

「これが・・・」

その段ボールを、右手でさすりながら

「これが・・・」

【神】の贈り物か・・・」

理事長はそう呟いた。

(第8話へ続く)

第7話 万物の根源（アルケー）（後書き）

~~~~~

次回予告

公園内のトイレに隠れ、私達は犯人が現れるであろうベンチを監視していた。
そしてとうとうその子は現れた！

急いで私は犯人の正体を確認しようとするが・・・？

次回 「 第8話 謎のメッセージ 」
~~~~~

## 第8話 謎のメッセージ（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、何者かのラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に向かった私達は・・・

~~~~~  
第8話 謎のメッセージ  
~~~~~

第8話 謎のメッセージ

ブラパラごっこに巻き込まれたり、ソーカルちゃんとぶつかったり、アルケイデイスカッションに（デカルトちゃんが）プチ参加したり・

結局、ポール公園についたのは午後5時5分。

手紙の主は5時12分までに、トイレ近くのベンチに座っているはず。この公園にトイレは1つ。そしてその前にあるベンチも1つしかない。

「ベンチには、誰も座っていないです」

「トイレとベンチは、完全に1対1対応。つまりあのベンチに・・・」

手紙の主は、今から現れるはず。
名探偵ラッセル〜 ラッセル〜 「

部長が張り切っている。

「デカちゃん達、どこにいておきますか？」

「・・・」

しばらく考えた私。

「あそこしかないわね」

私達はトイレの中……一番奥の個室に3人で潜り込んだ。

「わお〜。個室に3P!？　ラッセル〜　ラッセル〜」

「うらうら〜！」

「これは18禁小説じゃないの！
そういう発言は禁止!!」

「【P】は【philosopher】（哲学者）の【P】だよ！
ピタゴラス、何エロい事考えてんの〜？」

嬉しそうな部長。

「う……」

そして言葉に詰まる私。

「でも、みんなでトイレに入るなんて〜
デカちゃんも、ちよつとドキドキです〜」

「デカルトちゃんまで……」

他の個室には窓がない。だけどこの奥の個室だけは、小さな曇りガラスの窓がある。その窓をちよつと開けると、あのベンチが見えるのだ。

私達3人は狭い個室で身を寄せ合いながら、その時を待つ。

午後5時10分。

「僕、おしっこしていい？」

「ダメ！」

「僕、緊張するとおしっこしたくなるんだけど・・・」
知らないって。

「デ、デカちゃんも・・・その・・・ おしっこしたいです〜」

「ええ!？」

溜息をつく私。

「じゃあ別の個室行って、用を足してきてよ・・・」

「ほ〜い」

「は〜い」

2人が個室を出て行ったその時・・・

「は!？」

あのベンチに・・・

「誰!？」

何者かが歩み寄っていくのが見えた。背は私と同じぐらい。ブカブカの帽子を深くかぶり、大きすぎる黒いコートを着けている。

「あれじゃ・・・」

その子はトイレに背を向ける角度で歩いてきて、ベンチにちょこんと座った。

「誰かわからない」

迷ってる暇はない。私はすぐに個室を出ると、トイレの外に出た。

「・・・」

ベンチの方を見ると、その子が走り去っている姿が見える。

「く・・・」

私はすぐに彼女を追いかけようとした。どうしても・・・

「あの子は・・・？」

その子の正体を知りたい。だけど・・・

「！？」

ベンチの前を通り過ぎようとしたとき

【ピタゴラスに告ぐ】

そう書かれた手紙が、ベンチの上に置かれているのが目に入った。

「……………」

走り去るあの子と、その手紙……交互に目をやる私。追いかけたけれど、手紙も気になる。

結局手紙から目を離せない私は、必然的に歩が止まった。それを手に取り、裏返す。

【from U】

そう書かれていた。

「from……ユー……?」

顔を上げると……すでにあの人物の姿はない。

「……………」

「ピタ子……!」

「いつの間に、ベンチに行っただんですか?」

2人が仲良く、トイレから出てくる。

「ピタ子、誰かきたの?」

「う、うん……」

「誰だっ たんですか〜？ 気になります〜」

私は首を横に振った。

「私がここに来たら、すぐ逃げていった。帽子を深くかぶって、コート姿で・・・」

「いったい誰なのか・・・」

「え〜？ じゃ、ピタ子・・・
結局、わからないまま？」

「うん・・・」

「はわ？」

デカルトちゃんが、私の手に握られた手紙に気づく。

「それ、何です〜？」

「これは・・・」

2人の前に、私は【from U】の手紙を見せた。

「はわわ？ フロム・・・ユー？」

「表は？」

手紙をひっくり返す私。

【ピタゴラスに告ぐ】

「ピタ子に告ぐ？ 何、コレ？」

「さあ？」

「デカちゃんは、中を見てみたいです」

「まあ、まあ。まずはピタ子から見なよ」

「う、うん……」

私は封を切つて、中を取りだした。便せんが1枚あるだけだ。

「……」

たった1行だけ、そこには書かれてあった。

「どつ？ ピタ子？」

「何、書かれているんです？」

「うん……」

見せても問題ないと判断した私は、便せんを広げて2人に見せた。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

「お。いいね。ライバル心、伝わる！」

有界閉集合でいて挑戦的……僕、こつこの好きよ」

「はわわ〜 ルブラン君をめぐって、恋の三角関係勃発です〜」

「ちよつと2人も・・・ 大事な事忘れてるわよ！」

そう。この手紙は・・・

「大丈夫、言わなくてもわかってるよ。

この手紙のパラドックスをね」

明らかな矛盾を含んでいる。

「ええ？ デカちゃん、何が矛盾なのかわかんないです〜」

「コレ書いた人の立場になれば、すぐわかるよ」

さすがは部長。

「このピタ子に宛てた手紙は・・・

ピタ子がルブラン君に関わろうとしていた事を知っている。

しかも、今、ここにピタ子が現れる事も知っていた」

それだけじゃない。この【U】はルブラン君がここに来ない事も知っていた？

「はわわ〜 やっぱりデカちゃん、わかんないです〜」

「【ピタ子がここに現れるのをどこで知ったの？】って事々。

だって、この公園に来ようってなったのは・・・」

「ついさっきでしょ？」

「あ〜！！ わかったです〜！」

「デカちゃん達がここに来るのを決めたのは〜 ついさっきなのに」

「この手紙書いた人は〜 ここに来るのを知っていた〜
おかしいです〜」

「はい、デカ子！ 繰り返しの説明、ありがとさん」

「おかしいわ。ありえるの？」

「コレを書いた人・・・まるで未来を知ってたみたい」

「まあ焦らず。最初から整理しよう。」

「まずは・・・この公園に来ようと言ったデカ子が疑われるわね」

「はわ？ デカちゃんが!？」

「私がトイレの個室からベンチを見ていた時・・・デカルトちゃんも部長も、私の側にはいなかった。」

「でも僕は、デカ子がおしっこする【音】を聞いていた。」

「その間に、何者かがこの手紙をベンチに置いてるから・・・」

「デカ子はアリバイある。シロね！」

「・・・」

「きゃ〜！ デカちゃんのおしつこ……聞いてたですか〜！？」

「ラッセル！」

らっせる？ 皮肉にも部長のセクハラ行為が……デカルトちゃんの無実を証明した。

「そのデカ子と一緒にトイレから出てきた僕も……当然シロ」

そう言つと部長は私をじつと見る。

「え？ まさか私……疑われてる？」

「可能性の問題。否定はできないってヤツね」

「ちょ、ちょっと待ってよ。」

デカルトちゃんが公園に行こうと言つてから……

私達、ずっと一緒だったじゃない。こんな手紙を書く時間なんてないわよ」

「ちっちっち！」

部長は人差し指を左右にふった。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

「ほら、この手紙の内容。別に公園を示唆してるわけでもないし……
・
あらかじめピタ子が用意しておいて、今、そのベンチに置いた。」

その可能性もあるって事よ

「はわわ〜 自作自演です〜」

「え〜！ じゃあ私、嘘言っただって事じゃん！」

「ブラサイズを【C】って言ったのも嘘だったじゃん」

「そ、それとこれとは・・・」

「まあ、あくまでも可能性って事よ。

真実を追究したければ、あらゆる可能性を考えなきゃね。

それが僕達、哲学者の務めなんだからさ

「・・・・・・」

なんていうか・・・。部長にはいつも、うまく言いくるめられているような気がする。

「大丈夫。今んとこ、僕はピタ子が【U】だと思って無いから。

じゃあ次は、ここにいない人物の可能性を考えましょう。

ピタ子が見た子って？ どんな感じだった？」

「誰なんだろう？ あっという間に逃げていったけど・・・」

「もっと情報無いの？ 身長とか、おっぱいの大きさとか？」

「身長は・・・私と同じぐらいだったかな？」

コート着けてたから、おっぱいはわからないけど。

それと・・・」

私は見た。あの子が立ち去る時、コートの裾すそから

「何か、角張ったものが見えた。コレみたいな・・・」

髪の毛につけた三角定木のアクセサリーを2人に見せる。

「・・・」

部長がじつと定木を見つめた。なんだか私が【U】っていう可能性を増やしたような気もするけど・・・

「プラトンちゃんかな？ 数学倶楽部だし・・・」

それに彼女。そういうアクセ、持ってるわよ」

「プラトンちゃん・・・」

私と同じ【古代組】の子。いつも隣のソクラテスちゃんのために、必死にノートを取っている。ソクラテスちゃんは、ノートを一切取らない子で有名。なんでもプラトンちゃんは、ソクラテスちゃんをかなりリスペクトしているとか？

「でも、プラトンちゃんは、デカちゃん達が学校出る時、ずっと校内にいた感じだったです」

そうだ。

「確かに。私、同じクラスだけど・・・」

放課後はいつも、ソクラテスちゃんの後ろをついていたり・・・

アイデアアイデアと言って、校内で誰かとディスカッションしてる。
今日みたいだね。外に出るのは登下校の時だけ・・・」

「プラトンちゃんはシロです」

「うん。数学倶楽部で、ピタ子とプラトンちゃん以外で・・・
角張った小物持った子、他にいたかな？」

「ここは・・・テッ学の生徒全員を、捜査対象にするべきかもです」

「私と同じぐらいの背で、角張ったアクセを持った子・・・」

「デカちゃん的には、Pちゃんが見たのは」

Pちゃん自身、って感じですよ」

「話を総合するとそんな感じするよね」。

とつとつピタ子も・・・」

僕みたいに、パラドキシカルな子になっちゃった？」

「はわわ、デカちゃんもパラドキシカルなのに・・・
Pちゃんも仲間入りですか？」

いや・・・何、言ってんの？

「おお！ パラドキシカル！

3人ともパラドキシカルで3P！！」

ケラケラと笑う2人を横目に、今一度私はその便せんを見つめた。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

手紙の主が私？

「冗談。こんな手紙なんか、書いた事ないし！」

何よりも・・・この手紙書いた人物は、私の性格を全くわかってない。

「【邪魔するな】なんて言われたら、邪魔したくなるのが私よ！」

「うわ・・・ピタ子、なんかイメージ悪！」

「でもデカちゃんは、Pちゃんの事、好きです〜」

「いや・・・そんなフォローしたら・・・」

ホントに私、性格悪いみたいじゃん」

愛しのルブラン君に関わらないで？ それは私にとって、関わりなさいって言ってる事と同値だ。

「はい！ デカちゃん、1つ気づきました！

この【from U】！

【U】から始まる子を探せばいいと思いま〜す!」

「【U】か・・・僕の記憶では、【U】から始まる生徒・・・
テツ学には、1人もいないわ」

「あ、ホラ。

部長と同じクラスに【ワイトゲンシュタイン】ちゃんがいたでしょ?
よ?

あの子、イニシャル【U】じゃない?」

「ううん。彼女は【U】でなくって、【W】から始まるよ」

「デカちゃんの記憶にも、【U】から始まる子って・・・
あの学校にはいないです〜」

「【U】から始まる子はいない。なら、この【U】はいつたい・・・
?」

言いながら、部長が【U】を睨み付ける。

「・・・」

しばらく考えていた部長が、口を開いた。

「ユニオンかも・・・」

「ユニオン?」

「うん。集合で【U】はインターセクションだったでしょ?

【U】はユニオンを表したじゃん」

「昨日、部長から習ったヤツだ。」

「集合論は、現代の論理学とも密接に繋がっている。」

「僕たち哲学者が真なる何かを見つけようとしたら・・・」

「それを証明する道具が必要でしょ？ 集合論もその道具の一つってわけ」

「という部長の信念の元、私達は集合論を学んでいるけど」

「ユニオンか？ うん・・・」

「果たしてこの【U】は、ユニオンなのか？」

「最初ピタ子が見つけた【from U】。」

「そして今回は【from U】。」

「2つの手紙の主は、同一人物とみて間違いなさそうね」

「私も同一犯という意見に賛成だ。」

「最初が【インターセクション】。次が【ユニオン】を表しているなら・・・」

「表しているなら？」

「手紙の主は集合論を知っている人物。」

「そして集合論は【現代組】しか習わない。」

つまりこの手紙の主は……

僕と同じ【現代組】の子の可能性が高いわね」

「……」

エロセクハラオヤジではあるけれど……【現代組】ゆえの豊富な知識、それに説明のうまさ、何より洞察力の深さ。やっぱり【数学倶楽部】の部長として適任だなと思わされる。

部長の言う通り。【】と【U】が集合論の記号を表しているのだとすれば……

「【犯人】は【現代組】の子……」

この時の私は、意外な犯人の正体に気づくはずもなかった。

(第9話へ続く)

第8話 謎のメッセージ（後書き）

~~~~~

### 次回予告

部室へ戻った私達は、再びソーカルちゃんと遭遇する。これまでの状況を整理して犯人を探ろうとする。

倶楽部終了後、私は・・・

ルブラン君の家に向かった。

次回 「 第9話 ドツペルゲンガー？ 」

~~~~~

第9話　ドッペルゲンガー？（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

~~~~~  
デカルトちゃんの提案で、ポール公園に向かった私達。怪しい人物を見かけたが逃げられてしまう。そしてその人物は、これ以上ルブラン君に関わらないでというメッセージを残していた。

~~~~~  
第9話　ドッペルゲンガー？

## 第9話 ドッペルゲンガー？

午後6時前。

私達は学校に戻ってきた。部室の前で、再びソールちゃんと言った。

「ライデン瓶の中に、冬虫夏草を入れておくとね・・・」

カーボンによるサイクロンが発生し、コリオリの力で・・・」

相変わらず意味不明な事を・・・

「はいはい・・・」

僕たち、数学倶楽部のミーティングあるからさ」

先ほど同様、部長がソールちゃんの背中を押し・・・

「マヤ予言の真相は、リーマン予想によるコペンハーゲン解釈的で・・・」

「明日、話を聞くからさ。じゃあね、ソールちゃん」

物理倶楽部の部室へ押し込む。

「私！！ あなたのドッペルゲンガーを見たわ！！」

デジャビュ？ ソールちゃんは、私に指さしてそのセリフを言った。

「ばいばい」

部長は物理倶楽部の扉を閉めると、隣の数学倶楽部へ入っていった。私とデカルトちゃんが後に続く。

「結局手紙の主はわからなかったな」。

でも今日は・・・僕たちに来る事はここまでだね」

「そうね・・・」

「ただ、いくつか情報は得た。

ピタ子と同じぐらいの背で、角張ったアクセを持っている。

そして・・・」

「【】と【】です」

「手がかりはいくつか得られたけど・・・謎が多いわ・・・」

「まあそれは各自持ちかえって、考えるって事で。

明日また、わかった事を報告しあおう。

ほら、下校のチャイムもなったし。今日の数学倶楽部はお開き！」

「デカちゃんも、謎に挑戦してくるです」

「あ・・・」

私は気になる事を、2人に聞いてみた。



「ドッペルゲンガーって・・・何？」

「え!？」

「はわ!？」

2人は同時に驚いた表情を浮かべる。え？ 何で？

「ピタ子、知らないの？」

「はわわ〜 Pちゃんはドッペルゲンガーの事、知らないんですか〜？」

何よ・・・ 2人して・・・

「普通、知ってるものなの？ その・・・  
ドッペルゲンガーってヤツ・・・」

「有名なパラドックスの1つだよ。もう一人の自分の存在ってヤツ。  
同じ世界に・・・

見た目だけでなく、心も体も全く完全な同一人物がいるっていう」

「この世界に・・・ 全く同じ人がいる？」

「そうです〜 自分と完全に同じ人物が〜 その人のドッペルゲン  
ガーです〜」

よくわからない。

「じゃあさ。その全く同じ人物とやらが、顔を合わせたらどうなるの？」

「おつと〜・・・ ホントにピタ子、知らないんだね〜」

「だから、聞いているんじゃない・・・」

「はい！デカちゃんが教えてあげます〜！！」

自分のドッペルゲンガーを見た人は〜・・・」

見た人は？

「ズバリ、死ぬと言われてます〜！！」

「死ぬ！？」

「まあ、都市伝説の1つよ。

1人の人間は、この世に1つの命としてしか存在出来ない。

だから全く同一の人物が相対あいたいしたら・・・

どちらか、あるいは両方死んじゃうってわけ」

「・・・・・・」

未だによくわからないけど・・・

「自分のドッペルゲンガー・・・ 見ちゃいけないって事？」

「そうですね」

「例えば僕のドッペルゲンガーがいたとして・・・  
僕はそいつをチラリと見て、【僕のドッペルゲンガー？】と思う  
けど・・・」

「あちらも僕を見て、【僕のドッペルゲンガー？】・・・  
なんて思ってるかもね」

「うん・・・ そんな事、あるのかしら？」

「あくまでも都市伝説だからさ。  
量子力学では平行世界を考える場合もあって、そのブレーンを超  
えたら・・・」

「まあいいや。今日はもう帰ろう。僕、お腹空いちゃった」

「デカちゃんも、お腹ぺっこぺこです」

「ドッペルゲンガーはちょっと気になるけど・・・まあ、あくまでも  
都市伝説だしね。」

「うん。じゃあ明日・・・」

「こうしてこの日の数学倶楽部は・・・部長の集合論講義に始まり、  
手紙の主捜<sup>めじ</sup>しで終わった。結局、犯人は見つけられなかったけどね。」

学校を出た私は・・・

自宅とは違う方向へ足を運ぶ。

「・・・」

私はこう考えていた。

犯人は今朝早く学校に登校し、ルブラン君の靴箱にラブレターを入れた。そして今日の5時13分に、公園に来るようにと指示している。

ところが・・・そのラブレターは私が奪った。もちろんルブラン君が公園に現れる事はない。犯人の立場ならどう思うだろうか？

【ルブラン君にフラれちゃった】

これはマイナス思考。

【きつと何かの都合で、来られなかったのよ】

これがプラス思考。この世の思考も、プラスとマイナスがあるのは数学と同じ。

ただ・・・犯人は【私がラブレターを盗んだこと】を知って動いている。つまり【何かの都合】というのは、【私の邪魔】というわけだ。でなければ、あんな挑戦的なメッセージを私に残すはずがない。

1番最初の手紙から察するに・・・私同様、その子はルブラン君にベタ惚れのはず。ならば簡単に【諦める】という選択肢は存在しな

い。

つまり……

「……」

午後6時40分。

私は……

ルブラン君の家の前にいた。予想が正しければ

「犯人は、ここに現れる……」

ピーポー　ピーポー　ピーポー　……

閑散とした住宅街の中、救急車の音が鳴り響く……

私は電柱の影に身を寄せ、その人物を待っていた。

(第10話へ続く)

第9話 ドッペルゲンガー？（後書き）

~~~~~

次回予告

ルブラン君の家の前で張り込みする私。何とそこで、サンジェルマン理事長と遭遇してしまう。

そして理事長は・・・私にある手紙を渡した。

次回 「 第10話 理事長と手紙と私 」

~~~~~

第10話 理事長と手紙と私（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に向かった私達。怪しい人物を追いかけたけど、逃げられてしまう。そしてその人物は、これ以上ルブラン君に関わらないでというメッセージを残していた。

私はメッセージを無視。ルブラン君の家に向かった。

~~~~~  
第10話 理事長と手紙と私

## 第10話 理事長と手紙と私

ストーカーでも何でも、好きによぶがいい。私は惚れた相手に一直線。生年月日や血液型、住所だつて調べ上げる。

「さすがピタゴラス教団の教祖様」

誰!?

「……」

気のせいか。

住所はすでに調べていた私。でも、実際彼の家の前まで来たのは今日が初めて。

「すごい……お屋敷……」

お金持ちの子と聞いてはいたけど……私の目の前には、3階建ての大きな洋館が建っている。数学的に言うと、50m×50m×15mの直方体がスッポリ入るといった感じかしら。

屋敷に入るためには、大きな正門を通らなければいけない。門には誰も立っていないけど、何かしらのセキュリティはあると思う。

目的はあのラブレターの主を見つける事だけ……

「ルブラン君……姿、見せないかな？」



いつしか私の視線は、犯人ではなく愛しの人を探そうとしていた。

・・・。。。

待つこと20分。7時ちょうど。

「ピタゴラス君！」

電柱の影に隠れていた私に、透き通るようなテノール声がかけられた。

「ロ・・・ サンジェルマン理事長!？」

思わずロリコンと言おうとしたのは秘密。

「こんなところで・・・君は何を？」

視線は鋭いが、声は優しい。

「あ、えーっと・・・その・・・」

理事長はチラリとお屋敷の方に視線を合わせた。そして再び私を見る。

「ルブランに・・・会いに来たのか？」

「え!？ あ、いえ・・・」

いきなりど真ん中にストライクを投げ込まれた私。しどろもどろに

応える。

「……………」

理事長は無言で、スーツの胸ポケットに手をつっ込んだ。そして・

・

「ついさっき、ある女の子に会ってね。

これをピタゴラス君に渡してくれと……」

「え？」

私に手紙を差し出す。

【ピタゴラスに告ぐ】

「!?!」

ゴクリと唾を飲み込んだ。

「ま、まさか……」

「……………」

理事長が私の表情を伺っているけど、気づかない。震える手で、私はその手紙を受け取った。

「だ、誰が!?!」

封を切る前、思わず理事長に大声で聞いてしまう。

「ブカブカの帽子に、黒いコートの子だったが・・・顔を隠すようにしていたし、誰なのかはわからなかった」

公園で見たあの子だ！

「私が近くを通りかかったら、突然現れてね。」

【これを、あの家の前の電柱にいるピタゴラスちゃんへ渡して下さい】

そう言って手紙を渡すと、すぐに走り去ったよ」

「・・・」

起こりえない事が起きている。

デカルトちゃんと部長と別れた後・・・私は自分の意志でここに来た。その私を先回りした！？

「ありえない・・・」

「手紙を・・・見ないのか？」

理事長が手紙を見るように促す。

「・・・」

理事長に背を向けた私は、すぐに中に入っていた1枚の便せんを取り出した。

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！ ルブラン君、死んじゃうわよ！】

またしても1行。だけど・・・

「・・・・・・・・」

背中に事長の視線が突き刺さる。

「な・・・何が・・・」

何が起こってるの！？ 私の頭は混乱の極みだ。

もし・・・

もし、この手紙の内容が真実なら？ 出所は未だに不明だが、この手紙の主は私の行動を知っている。そして今度はルブラン君が死ぬとまで言ってきた。

出任せ？ それとも、まさか・・・ホントにルブラン君は、死んじやいそうなの？

心拍数が上がっているのが自分でもわかる。

「り、理事長。さよなら！ また明日、学校で！！」

とつても嫌な予感がした私は、大通りに出てタクシーを止めた。

「市立病院まで！！」

運転手にそう告げると、祈るように窓の外を見上げる。

「この手紙が、デタラメであることを証明しなければ・・・」

安心できない。私の視界の隅・・・サンジェルマン理事長が、ルブラン君のお屋敷に入っていく姿が映る。

「・・・」

でも、ルブラン君の安否を気にしていた私は・・・それに気づくことはなかった。

(第11話へ続く)

第10話 理事長と手紙と私（後書き）

次回予告

あまりにも突然の出来事だった。

ルブラン君は・・・

交通事故に遭って・・・

次回 「 第11話 ルブラン君の死 」

## 第11話 ルブラン君の死（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

犯人の現れる可能性が強いポール公園に向かった私達。怪しい人物を見かけたけど、逃げられてしまう。そしてその人物は、これ以上ルブラン君に関わらないでというメッセージを残していた。

メッセージを無視した私は、ルブラン君の家に向かう。そこで理事長と出会い、手紙を渡された。その手紙には・・・

~~~~~  
第11話 ルブラン君の死  
~~~~~

第11話 ルブラン君の死

私が謎の手紙を受け取った翌日。

3月15日。

聖フィロソフィー学園の全校生徒が体育館に集められた。

そしてサンジェルマン理事長の口から・・・

【近代組】に所属するルブラン君・・・彼の【死】が報告された。

自宅近くでの交通事故。ほぼ即死状態だったという。

体育館の至る所から、すすり鳴く声が聞こえてくる。

「・・・・・・・・」

涙を流すことはない私。昨夜、病院で彼の死に顔を見た時・・・涙
枯れるまで泣きはらしたからだ。

「・・・・・・・・」

ルブラン君の死に直面してから、今に至るまで

「・・・・・・・・」

私の記憶はない。何がどうなってるか、その判断能力もない。

好きな人を失った・・・それが事実なのだろうけど、その意味すらわからない。哀しみだとか愛だとか、生きるだとか死ぬだとか・・・

今の私は何も解らない。

「・・・・・・・・」

真つ赤な目を理事長に向け・・・

私は抜け殻のように、呆然と立っていた。

・・・・・・・・。

放課後、数学倶楽部。

「私のせいよ!!」

私はデカルトちゃんと、部長を前に・・・自分を責めていた。

「ホントは・・・ホントは私・・・

ルブラン君の靴箱から、あのラブレターを盗んだの!!」

正直に話す。

「私が盗まなければ・・・

ルブラン君は公園に行っていた。交通事故にも遭わなかった!!」

テーブルに突っ伏し、大声でわめいた。

「……はわわ……」

デカルトちゃんは、どんな言葉をかけたらいいかわからない様子で・

「……」

部長は、無表情で私を見ている。

やがて部長は……わめく私をよそに、眉間にしわをよせた。

「……」

何かが腑^ふに落ちないといった様子だ。数分後、ようやく部長が口を開く。

「ねえ、ピタ子さあ。昨日、病院行ったんだって？」

ルブラン君が運ばれた病院に……？」

「それが何よ！！」

逆ギレ気味で返事する。

「どうしてピタ子……ルブラン君が病院に運ばれた事、知ってたの？」

僕たちは誰一人、彼が事故に遭った事を知らなかった。

今朝の全校集会までね」

「……………」

沈黙を保つ私。

「……………」

しばらくして私は、ポケットからあの手紙を取り出した。理事長から譲り受けたその手紙を、テーブルの上に広げて置く。

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！ ルブラン君、死んじゃうわよ！】

「これ……………」

「え！？ また、手紙もらったの？ 誰から！？」

「はわわ……………」

「みんなと別れた後、理事長と偶然会って……………」

この手紙を渡された……………」

「理事長から！？」

まさかコレ、理事長が書いたわけじゃないでしょ！？」

そりゃそうだ。直接会ってるんだから、手紙経由で会話するわけがない。

「誰からの手紙！？」

「ブカブカ帽子で黒コートの子から・・・
私に渡すように手紙を預かったって。」

多分、公園で私が見たのと同じ子だと思う・・・」

「はわわゝ　それでPちゃん、病院にいたんですね」

「どこで!?!　どこでそれ、もらったの!?!　学校?」

私は首を横に振る。

「ルブラン君の・・・家の前。あの手紙の主を捜したくて・・・」

ここまで来たら、とことん正直に話すわ。

「そこで理事長と会った?」

「うん・・・」

「・・・」

ちよつと悩んだ表情を浮かべた部長は

「なるほど。偶然にしては出来すぎな気もするけど・・・」

【今すぐ、市立病院へ行きなさい!　ルブラン君、死んじゃうわよ
!】

「・・・」

じつとその文面を凝視する。

「あのさ……」

「？」

不意に部長は私の手を握ってきた。

「……」

ゆっくりと顔をあげる私。デカルトちゃんも、部長に視線を合わせる。

「僕、思っただけど……」

部長は、衝撃的な事を口にした。

「ルブラン君…… 殺されたんじゃないかな？」

「え！？」

「ええ！？」

(第12話へ続く)

第11話 ルブラン君の死（後書き）

~~~~~

### 次回予告

部長は昨日の出来事を紙に書き始めた。

そして理事長から貰った手紙の裏に書かれた【from】を見て・・・

手紙の主を特定する。その人物は、1日前に私達が遭遇した人物の中に・・・

次回 「第12話 部長の予言」

第12話 部長の予言（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

~~~~~  
第12話 部長の予言

## 第12話 部長の予言

「はわわわ……」

「ル、ルブラン君が……殺された!？」

部長の言葉で、一気に現実に戻った。

「ちよつと……声、おさえてよ……」

「はわわわ……」

「どうして!？ 何でそう思うの!？ 誰かが車でひき殺したっての!？」

矢継ぎ早に質問する私。

「まあまあ。落ち着いて。順を追って説明するから」

冷静な部長は、テーブルの上に紙と鉛筆を用意した。

「情報をまとめる。そこから導き出される可能性を全て考慮し……」

論理的な推論の元で……」

言いながら、紙の上に何かを書き出していく。

3月14日

AM7:00 ピタ子。



靴箱からラブレターを盗む。カントちゃんとニアミス。

P M 3 : 1 0 頃 ピタ子、僕、デカ子。

部室で【集合論講義】。ルブラン君宛のラブレターを見せられ、差出人を捜す事に。

P M 3 : 3 0 頃

デカ子の発案で、公園に行くことを決定。

P M 3 : 4 0 頃

ソーカルちゃんと遭遇。

・・・

「昨日の事・・・まとめてるのよね？」

「そう」

P M 5 : 1 1

デカ子がおしっこ。証人、僕。

「はわわ・・・」

デカちゃんがおしっこしてた時の事も、書き込みますか？

「もちろん。デカ子がシロだっという根拠になるし」

P M 7 : 0 0 頃

ピタ子、理事長から手紙を渡される。

【ピタゴラスに告ぐ】

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！ ルブラン君、死んじゃうわよ！】

P M 7 : 4 0 頃

ピタ子、病院でルブラン君が死んだ事を知る。

「よし。完成！」

私達は、部長が書いたそれに目を通す。

「まずコレよね」

P M 5 : 1 2

ピタ子がコート姿の子を見た。しかし逃げられる。  
ブカブカ帽子、黒コート。三角形のアクセ。

P M 5 : 1 4 頃

ベンチの上にあつた手紙を確認。

【ピタゴラスに告ぐ】 【 f r o m U 】

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

「内容から察するに、手紙の主はピタ子が手紙を盗んだことを知っていた」

「まあ、そう考えるのが妥当よね。

でもどこで…… 私がラブレター盗んだの知ったのかしら？」

「僕とデカ子が、ルブラン君に宛てられたラブレターを見たのは……」

P M 3 : 1 0 頃 ピタ子、僕、デカ子。

部室で【集合論講義】。ルブラン君宛のラブレターを見せられ、差出人を捜す事に。

「3時過ぎ。

この時から【from U】の手紙に遭遇するまで……

僕たち3人、ずっと一緒に行動していた。

つまり僕とデカ子は、この手紙を書くだけの時間はなかった」

「最初から……部長とデカルトちゃんは、疑ってないわよ」

「デカちゃん的には、やっぱりカントちゃんじゃないですか？」

朝一で、Pちゃんとニアミスしてるし」

「あの角度では……絶対私、見られてないと思う」

「カントちゃんの事は頭に入れておく。大事なのはこの先……コレよ」

P M 6 : 4 0 頃

ピタ子、ルブラン君の家の前に現れる。

PM7:00頃

ピタ子、理事長から手紙を渡される。

【ピタゴラスに告ぐ】

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！ ルブラン君、死んじゃうわよ！】

「病院へ行けと警告した人物なただけどき。逆算すると・・・

ルブラン君が車にひかれた直後、この手紙を書いている事になるわ」

「はわわ・・・ ルブラン君が車にひかれたのに、  
こんな手紙を書くって・・・

そんな神経の持ち主、いるんですか？」

「ヘタしたら・・・

ルブラン君が車にひかれる前に、手紙を書いた可能性もある」

「え！？ そ、そんな事・・・あり得るの！？」

「まあ、可能性としてはあるっただけで。

やっぱりルブラン君が事故に遭った直後に、書いたと思う方が自然かな。

どちらにせよ・・・」

どちらにせよ？

「この手紙の主がルブラン君を殺したと思えば・・・  
スジが通るんじゃない？」

「ええ！？」

「はわわ・・・」

「僕の仮説はこう。

ストーカー並にルブラン君を愛するがあまり・・・

抱きついたか、何かの拍子で彼を道路に押し出した。  
そして彼は車にひかれてしまった」

「・・・・・・」

「突発的な事故ですか？」

「うん。その子は自分のラブレターが、ピタ子に盗まれた事を知っている。

いわばルブラン君をめぐって、恋敵と思ってるわけだから・・・

死ぬかも知れないルブラン君に・・・

最後、ピタ子を会わせてやるうとした」

「だから・・・ あんな手紙を書いた？」

「そんなところね」

かなり無理のある話のように思える。

「苦しい仮説なのはわかってる。ただ1つ。どうみても、この手紙の主は……」

ルブラン君の【死】に関わっている。それだけは間違いないと思う」

ルブラン君が車にひかれた直後に手紙を書いているのだから……

「デカちゃんも、部長の話聞いてたら、そんな感じがします」

「うん。私も……」

確かにそんな気がしてきた。でも……

「いったい誰が？ ルブラン君の死に関わってる人物なんて」

「はわわ、誰なんでしょう？」

「そう言えば……」

部長が何かを思い出す。

「ほら、理事長からもらった手紙」

「ん？ 何？」

「【from】【とか】【from】U【とか、書いてなかった？」



「そうね。こりゃ、意味なんてなさそ……」

突然部長の眉がっり上がる。

「……」

【】【】【】

じつと3つの記号を見つめながら……

「まさか……」

首を横に振った。

「部長？」

「どうしました？」

「……」

部長の視線は、3つの記号を見つめたままだ。

「部長？ 何かわかったの？」

「い、いや。まさか……ね……」

「はわわ〜 何か解ったら、デカちゃん達にも教えて欲しいです〜」

「そうよ。部長……」



「……………」

眉をつり上げたままの部長。

「ピタ子。最初の手紙、持ってるわよね？」

【from】【のヤツ】

「うん」

「見せて」

私はポケットに入れっぱなしだったその手紙を、部長に渡す。

「……………」

部長は便せんを取り出し、それを凝視した。

「5……………13……………」

「？」

「もしも……………」

部長は手紙を見つめながら

「もしも次、こんな手紙が来てさ。それが……………」

「それが？」

「アルファからの手紙だったら・・・」

「（アルファ）？」

【（アルファ）】・・・【】に次いで、角度を表すのによく用いられる記号だ。

「アルファだったら、どうなるんですか？」

「手紙の主が確定する。確率的にも、ほぼ間違いなく・・・」

「だ、誰よ、それ!？」

私は、その手紙の主・・・犯人の正体を問い詰める。

「今は言えない。だって・・・」

いつもの部長とは違う。魂が抜けかけたような感じだ。

「だって、ありがたい事だから・・・」

「はわわゝ 教えて欲しいです」

部長は首を横に振った。

「これは冗談抜きで、パラドックス・・・」

この部長の反応。

「・・・」

もしかして・・・

「私達が知ってる人？」

ピンと来た私。

「うん」

部長はそれを認める。

「誰!？」

「言えない。それを口にすることは・・・

哲学者にとって、大きな覚悟がある・・・」

「はわわ〜 こんな真剣な部長、初めて見ます〜」

「・・・」

知りたい。でも部長にも部長の哲学がある。簡単に人の哲学を否定してはいけない。いけないけど・・・

「じゃ、じゃあ・・・」

昨日1日、私達が会った人物の中にその人はいる？

それだけでいいから、教えて!」

「・・・」

逡巡の後、部長は・・・

「いる・・・」

私と目を合わせず、そう言った。

部長の予言したアルファからの手紙。

今から3分後・・・

その手紙を手にするなんて、夢にも思わない私達だった。

(第13話へ続く)

第12話 部長の予言（後書き）

次回予告

部室を出た私は、ソーカルちゃんとぶつかった。

いつもとは、何かが違うソーカルちゃん。そんな彼女から・・・

私は【from】の手紙を受け取った。

次回 「第13話 違和感」

### 第13話 違和感（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

ラッセルちゃんはルブラン君が誰かに殺されたという。そしてもし【 】からの手紙が来たら、犯人は私達の知っている誰かだと言いつ切った。

~~~~~  
第13話 違和感  
~~~~~

第13話 違和感

キーン コーン カーン……

校内放送だ。

「【古代組】のピタゴラス君。至急、理事長室へお越し下さい。
繰り返します。【古代組】のピタゴラス君。至急、理事長室へ……」

「はわ？ Pちゃんの呼び出しです」

「な、何だろう？」

私はイスから立ち上がった。

「僕も行く」

部長も続いて立ち上がる。

「え？ 呼び出されたの、私だけよ？」

部長は首を横に振った。

「わかってる。でも僕も行く。いや、行った方がいい」

エロセクハラキャラなのに……今はそんなそぶりが微塵もない。

「じゃあ、デカちゃんもいきます」

この展開を読んでいた私は

「お好きなように」

と告げ、真つ先に部室を出た。

ボタン！！

「あ……」

部室を出た私は、出会い頭に誰かとぶつかる。

あれ？ つい最近もこんな事があったような？

その場で倒れてしまった私。

「いてて……」

お尻をさすりながら前を向くと、色々な数式や化学記号がプリントされている洋服が目に入る。

「ソーカルちゃん！」

昨日と全く同じシチュエーション。違うといえば、ぶつかった子の名前を私が知っている事ぐらいだ。

「……」

私と視線を合わせたソーカルちゃんは

「今ね。今・・・」

LHCで、光より速いニュートリノの観測に成功したって！

わかる？　どんなにすごい事が起こったか？」

顔を近づけ、嬉しそうに語ってきた。

「アインシュタインちゃんの相対性理論が崩れるのよ！
タイムマシンが作れるの！！」

「はいはい。わかった、わかった・・・」

昨日同様、私の次に部室を出てきた部長が

「天動説が地動説に変わった時と同じくらい・・・
哲学に大きな波が押し寄せるわ！！」

やはり昨日と同じように、ソーカルちゃんの中を押していく。

「ほら。【物理倶楽部】は、隣だから・・・」

「あと1つ！　あと1つ、数式を解ければ・・・
タイムマシンが・・・」

「そうね。光より速い物質があれば・・・
タイムマシン、作れるわよね」

そして隣の【物理倶楽部】へ押し込み、扉を閉めた。

「さ、行く。理事長室」

邪魔者をカタした部長が、笑顔を見せる。

「うん。でも……」

逆にモヤツとした表情を浮かべる私。

「どした？」

部長が私の顔を覗き込む。

「うん。なんかあの子……今日、変じゃない？」

「どこがです？」 昨日もあんな感じでしたよ？」

部室から出てきたデカルトちゃん。

「いや、ほら。」

昨日は意味不明な事、しっちゃんかめっちゃんか言ってたのに……

今日は、話のスジが通っていたような……？」

そう。少なくとも私には……昨日のソーカルちゃんと、別人に思えた。

「まあ、あの日ってヤツじゃない？ さ、行く」

「うん……」

ボタン！！

「ちょっと待って！！！」

物理倶楽部の扉が勢いよく開いたかと思うと、ソーカルちゃんが再び出てきた。

「……………」

違和感を感じる私。再び顔を出す事なんて、昨日はなかったのに。彼女は私に詰め寄ってくる。

「な、何か？」

「コレ！ あなたにとって！！！」

そして一枚の手紙を差し出した。

「10分前に、預かったの！」

ソーカルちゃんが差し出した手紙には

【ピタゴラスに告ぐ】

そう書かれている。

「！？」

「……………」

「はわわ・・・」

震える手で、私は手紙を受け取った。

「だ、誰？ 誰からこの手紙を！？」

すぐにソーカルちゃんに詰め寄る。

「さあ？」

いつものマシンガントークはどこへやら。彼女はニヤニヤしながら・・・そのまま物理倶楽部の部室に戻り、自ら扉を閉めた。

「ちょ・・・ 待つて！ いったい誰がこれを！？」

物理倶楽部の扉を開けようとした私の肩に、部長がポンと手を置く。

「ピタ子。裏、見てみなよ」

「・・・」

言われた通り私は、手紙の裏側を上に向けた。

「はわわ・・・」

そこには・・・

【 from 】

部長が予言した【 】が書かれていた。

「な……」

呆然とする私と

「はわわ……」

デカルトちゃん。そして……

「……」

部長は

「でも、これで……手紙の主は確定した……」

私の横で寂しそうに呟いた。

(第14話へ続く)

第13話 違和感（後書き）

次回予告

私はとうとう・・・

部長の口から、手紙の主の名前を知る事になる。

次回 「第14話 犯人の正体」

第14話 犯人の正体（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

ラッセルちゃんはルブラン君が誰かに殺されたという。そしてもし
【】からの手紙が来たら、犯人は私達の知っている人物だと言い
・
・

私はソーカルちゃんから、【from】の手紙を受け取った。

第14話 犯人の正体

第14話 犯人の正体

「誰！？ 誰なのよ！？」

私は部長に詰め寄る。

「その前に……手紙の中は？」

「何で！？ 手紙の主が確定したんでしょ！？ すぐ教えてよ！！」

「僕自身、その子が手紙の主とは思えないんだ。
だからまず……手紙の中を見たい」

「だ……」

言葉をのみ込む私。

「……」

ここで言い争っても仕方がない。深呼吸をした私は手紙の封を開け、中を取り出す。毎度のように便せんが1枚入っていた。

【3人で理事長室へ】

「……」

「はわわ」

「パラドックスのオンパレードね・・・」

ソーカルちゃんの証言では、この手紙が渡されたのは10分前。しかし私が理事長室へ呼び出されてから、まだ5分と経っていない。

「ど、どういう事？ 何で？ まるで、未来から送られた手紙みたい・・・」

「デカちゃんわかりました〜！

理事長があらかじめこれを書いて〜

ソーカルちゃんに渡したと思います〜」

さすがデカルトちゃん。1番納得いく答えだわ。でも・・・

「そんな手の込んだ事・・・あの理事長がやるかしら？」

その時の私はそう思っていた。

「デカ子、ピタ子。理事長室、行くわよ。そこに答えがある・・・」

部長は犯人の名を明かさず、私達の先頭に立って理事長室へ向かう。

「・・・」

その後ろを私、最後尾をデカルトちゃんが続いた。

・・・。

理事長室の前まで来た私達。スーツ姿の見慣れぬ2人の男が

「それでは、また明日」

そう言って、理事長室から出てくるのを見た。一礼した男達は、向こう側へ歩き出す。

「もし、RDNDの話が本当なら・・・

医療の現場に革命が起こせるな・・・」

RDND？

「ああ。特許を取れば、間違いなく・・・
数兆円の利益を得られるというのに・・・」

す、数兆円！？

怪しげな会話をしながら、男達は視界から消えていく。何だろう？

理事長お得意の【錬金術】がらみかしら？

「・・・」

理事長室の前に立った私は

トントン。

「失礼します」

ノックをした後、理事長室へ入っていく。

「失礼しますです」

「失礼しまつす」

デカルトちゃんと部長も私に続いた。

理事長室に入るのは初めて。20畳ぐらいだろうか。広い部屋の周りをぐるりと囲むように、ガラスケースがある。そのガラスケースの中には・・・地図とか人形とか、色んなオブジェのような物が見えた。

「ああ。ちよつと待ってくれ」

サンジェルマン理事長は何枚かの書類を抱えて、奥のデスクに向かっていた。

「・・・」

その書類の文字が目に入る。

【RDND】？ 【仮死】？ 【硫化水素】？

何だろう？ さっき出て行った人たちが言ってたヤツかな？

「3人できたか・・・」

書類をデスクの引き出しにしまいながら、理事長が呟いた。

「あ、あの・・・ 呼び出されたので・・・」

「わかっている。後ろの2人も入りなさい。そのソファに座りたまえ」

部屋の中央にある、大きな大理石のテーブル。その前にある横長のソファに私達は座った。

「ふつかふかです」

嬉しそうなデカルトちゃんとは対照的に、私と部長は緊張気味。

「さて・・・」

理事長は、向かいのソファに座ると・・・

「呼び出した理由はこれだ・・・」

【ピタゴラスに告ぐ】

一枚の手紙を、表にして差し出した。

「・・・」

驚いたのは一瞬。さすがにもう慣れてしまった。それに・・・

「なるほど・・・」

横で頷いている部長は、手紙の主を知っている。

「君達に聞こう。この裏に、何が書かれているかな？」

「……」

これが呼び出した理由なの？

「……」

私とデカルトちゃんは、同時に部長の方を見る。部長は、理事長に視線を合わせて

「フロムガンマ」

と言った。ふるむがんま？

「ふふ。さすがは本校数学倶楽部の部長……」

嬉しそうな表情を浮かべた理事長は、手紙を裏返す。そして私達の目の前に……

【from】

手紙の裏に書かれた、それが映った。いっけん英語の【^{アール}r】に見えるが、これはギリシア語の【(ガンマ)】だ。

「はわわ……」

「……」

私の脳裏にデカルトちゃんの言った事が浮かぶ。手紙の主はやっぱり

り・・・理事長では？

そういえば昨晚、ルブラン君の家の前にも理事長はいた。何故あの時間、あの場所に理事長がいたのか？

それに私達が公園に行く前にも、理事長に会っている。そして今日・

理事長は私達を校内放送で呼び出す前、あの手紙をソーカルちゃんに渡した。デカルトちゃんの仮説を認めれば、全てつじつまが合う。でも、理事長がこんな手の込んだ事を？

「・・・」

とはいえ【理事長が犯人】である事以外、この事態をうまく説明する事が出来ない。

「あの・・・その手紙、いったいどういつつもりで？」

あなたが書いたんですか？

「ピタゴラス君。この手紙が、誰によって書かれたのか・・・？君はまだ、わかってないようだ」

わかってるけど・・・手紙の主があなたよ！だなんて、目上の人には言いづらい。

「はい！」

重い空気が流れる直前、デカルトちゃんが手を挙げた。

「デカちゃんの推理によれば、この手紙の主は」

立ち上がったデカルトちゃんは、目の前の理事長に指さすと・・・

「サンジェルマン理事長！ズバリ、あなたです！！！」

ドヤ顔で言つてのけた。えらい！よくぞ言ってくれた！天然キヤラのみが許される無礼講だ。

「・・・」

「・・・」

しばし静寂の時間が流れる。

「ブー！デカ子、大ハズレ！」

静寂をうち破つたのは部長だけど・・・え？違うの？

「デカ子が・・・」

一番最初に、犯人を言い当てていたんだけどな、残念！」

え？

「では、ラッセル君。この手紙の主は・・・誰かな？」

そうだ・・・

何故、部長は【】からの手紙だと知っていた？ 謎はまだ残っている……

「ええ、僕にはわかりません。この手紙の主は……」

部長は私をじっと見つめた。

「？」

キョトンとする私を指さした部長は……

「ピタ子です」

こともあるように、私を犯人だと言った。

(第15話へ続く)

第15話 証明(前書き)

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物(犯人)は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は・・・手紙の主は私だと言った。

~~~~~  
第15話 証明

第15話 証明

「ちよ……」

「根拠は？」

私の反論より先に、理事長は部長へ質問する。

「まず最初にピタ子が手にした手紙に【from】とありまし
た。

・ 僕は最初、【】をインターセクションだと思っていましたが・

後に、これはギリシア語の【(パイ)】を表していると確信し
ました。

英語で言つと【P】

「ふむ……」

「次にピタ子が手にした手紙。ポール公園で見つけた【from
U】。

こちらは英語の【U^ユ】か、集合論のユニオンかと思いましたが・

ギリシア語の小文字【U^ウ】です。英語で言つと【y】

「ちょっと待ってくれ」

理事長がストップをかけた。

「お二方にもわかるよう・・・」

お二方？ どうやら、私とデカルトちゃんらしい。

「これに書くといい」

そついうと理事長は、自分のデスクから紙と鉛筆を取り出し、部長の前に置いた。

【 P 【 U
【 y 【 U

部長はギリシア語と英語の両方を書いて見せる。

「3枚目はルブラン君の家の前で、ピタ子が理事長から渡された手紙。」

【 f r o m 【 。 【 (シータ) 【 の英語での対応は 【 t h 【 「

発音記号でお馴染みの記号だ。

【 P 【 y 【 t h 【
【 U 【

ん？ なんか見覚えが・・・

「4枚目はここへ来る前、ソーカルちゃんからもらった【 f r o m 【 。

【 (アルファ) はもちろん
「・・・」

英語の【a】。

【p】 【y】 【t】 【a】
【u】 【c】 【g】

え？ え？ まさかこれって・・・

「そして今、目の前にある【from】
【g】にあたります」

【p】 【y】 【t】 【a】
【u】 【c】 【g】

「はわわ・・・」

「もし、次の手紙があるなら・・・」

「待って・・・」

私は部長の手を止め・・・

【 (オミクロン) 、
【 (ロー) 、
【 (アルファ) 、
【 (ゼータ) ・・・】

次に来るであろう、ギリシア文字を書いて見せた。

「しし名答・・・」

部長の寂しい返事が返ってくる。英語対応は【o】【r】【a】【s】だ。

【P】【y】【t】【h】【a】【g】【o】【r】【a】【s】
【P】【y】【t】【h】【a】【g】【o】【r】【a】【s】

その場にいた4人全てが・・・

私の名前【Pythagoras】^{ピタゴラス}を凝視している。

「な、何でギリシア語？」

「ピタ子、ギリシア出身じゃん。サモス島から来たんでしょ？」

「そくだ・・・けど・・・」

聖フィロソフィー学園は世界各国から生徒を募っている、いわば多国籍軍。学園内の公用語は日本語と英語。

「母国語なんて、久しぶりに見た・・・」

でも、待って。

「私、こんな手紙、書いた事ないわよ？」

「いや。ピタ子を書いたんだ、間違いない」

「だからこんな手紙、書いてないってば・・・
本人がそう言ってるんだから・・・」

「証明して見せようか？」

部長は自信満々で私の顔を覗き込む。

「是非とも証明して貰おうかしら」

私も自信満々で言い返す。犯人は勝手に人様の名前を使って、私を陥れようとしているに違いない。

「じゃあ、もしさ・・・」

「？」

「もし、僕が正しかったらさーピタ子のブラ、ちょうだい」

「さらさら。理事長の前で、なんつー・・・」

「いいわよー!」

でもまあ、私が犯人のワケないし。その賭けにのることにした。

「じゃあ、部長が間違ってた場合は？ 部長は私に何かしてくれるの？」

「ピタ子のブラ、2度とハズさない」

んー・・・ なんか私に得があるように思えない気もするけど・・・

「のった!」

私は部長に右手を差しだし

「It's a deal!」 (決まりね!)

お互い、しっかりと握手した。

これから先、ブラパラごっこに巻き込まれる事は無い。前向きにこの交渉をとらえよう。

「で? どうやって私が手紙の主だと?」

余裕の私に、部長はニヤリと笑った。

「ピタ子のリュック、持ってきて」

「え? 私のリュック?」

「そ

「何で?」

「証拠がそこに入ってるから」

「.....」

全く部長の意図が見えない。見えないけど.....

「わかった。その証拠とやら、私も納得できるんでしょっね?」

それで白黒つくのなら.....

「もちのロンよ！」

「……………」

しばらく部長の顔を見た後、理事長の方に視線を移す。

「ラッセル君の言う通りに」

どうやら理事長も、それを望んでいるらしい。

「では……………」

私はソファから立ち上がると……………

「失礼します」

一礼して、理事長室を出て行った。そして自分のクラス【古代組】へ向かう。ロッカーからリュックを取り出し、それを背負うと再び理事長室へ向かった。

……………。

「これがかの有名なピリレイスの地図だ。

1513年に描かれたと言われている」

「はわわ〜 あの時대에、こんな地図を描けるなんて〜」

「理事長、この金色のロケットは？ 僕、こついつカッコいいの欲

しい」

「それはコロンビアで発見された、黄金のシャトルだ。年代測定の結果、今から1000年以上前のものだそうだ」

「1000年!？」

「1000年も前に、こんなスペースシャトルみたいなものが？」

「ああ。不思議だろ？ 飛行機なんてもちろん無い時代の代物。こちらに来てごらん。メキシコで発見された恐竜土偶がある。

これは、人類と恐竜が共存していたことを示唆する……」

カチャリ

「失礼します。戻りました……」

私が理事長室に戻ると……デカルトちゃんと部長は目を輝かせて、室内にあるガラスケースの中身を覗いていた。

「ああ、ピタゴラス君。戻ってきたね。では……」

再び私達は、大理石のテーブルを取り囲んだソファに座る。

「ほら、部長。リュック、持ってきたわよ」

テーブルの上にリュックを置くと……

「ちよつと失礼……」

部長がリュックを手にした。

「……………」

黙って様子を見守っていると……

「だいたいピタ子。大事なのは、この奥のポケットに入れるんだよね
）」
「こないだは、そこに替えのパンティ入れてたし」

「ちょ……………」

理事長の前で何を…… いや、それ以前に勝手に私のリュックを・
・

あれ？ そういや先週、替えのパンティ入れた時…… 無くなっ
てたけどまさか……………？

「ちょっと部長！ まさか私のパン……………」

「あつた!!!」

問い詰める前に、部長が声をあげた。その手には手紙が握られている。

「……………」

表に【ルブラン君へ】と書かれていた。これは……

「はわわ〜。これは、Pちゃんが最初にデカちゃん達に見せた手紙

です」

部長はそれを裏返す。

「はわ？ 【from】が無いです」

これは私がルブラン君のために書いたラブレターで、最初からルブラン君の靴箱に入っていたものではない。裏に何も書かれていない事が、それを証明している。

「ちよ、ちよつと。それはダメ・・・」

すぐに部長の手から手紙を奪い取った。

「それが証拠だよ、ピタ子」

え？ これが証拠？

じつとその手紙をしてみる。

「裏には【from】とか、書かれてないの？」

「一連の手紙には、必ず【from】と書かれてあった。」

「中、見れば一発だから」

「中？」

そう言えば私、どんな事書いたんだっけ？


~~~~~  
信じられない表情を浮かべる私がいたのは、言うまでもない。

(第16話へ続く)

第15話 証明(後書き)

~~~~~  
次回予告

パニックになる私。

そんな私達に、理事長は数学の問題を出してきた。

それを解く事が出来れば・・・全ての謎が明らかになるといっ。

次回 「第16話 合同数」

~~~~~

## 第16話 合同数（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は・・・手紙の主は私である事を証明した。

~~~~~  
第16話 合同数  
~~~~~


第16話 合同数

「は……はわわ〜」

「な、何コレ？ あの手紙と、一緒じゃない……」

「ね？」

部長が勝ち誇ったような笑顔を浮かべている。

私はポケットに入れていた【from】のラブレターを取り出す。中の便せんを取り出し、今一度それを見ると……全く同じ事が書かれていた。

「な……何で!？」

「はわわ〜 同じ手紙が2通です〜」

「どちらもピタ子を書いた手紙って事さ」

嘘よ！ ありえない!!

「……」

2通の手紙を見比べる同じ。いつけん同じに見えるが、唯一違う点がある。

「う、裏に……【from】ってないわよ？」

「でも一字一句違わず、手紙の内容は同じ……でしょ？」

確かにそうだ。驚くべき事に、筆跡も全く同じ。
私のラブレターと【】からのラブレター…… 違うはずなのに
中身が一緒って？

頭の中がさらに混乱する。

「嘘よ！ 絶対、嘘！ 何か…… 亡霊の陰謀よ……！」

「はわわ……」

デカルトちゃんのセリフをとってしまった私。それほどパニックの
極みだ。

「今思うと、ピタ子らしい手紙だわ」

「嘘…… 何で？」

「ピタ子の好きな数字が書かれてあるの…… わかる？」

「数字？」

「この手紙の中に出てくる数字が3つあるけど…… 言うてみて。

漢数字以外ね」

「えっと……」

手紙を見渡すと・・・

「5と13と・・・1?」

「いんや。13分の1分前だから、12だね。
5と12と13。何か浮かばない?」

これは・・・

「5の2乗プラス、12の2乗イコール・・・13の2乗。
ピタゴラス数?」

「ね? ピタ子らしい手紙ってワケ」

そう言うと部長はエロそうにニヤリと笑った。

「じゃ、ピタ子のブラ、貰うから」

これでパンティとセットでゲット」

あ、後ででいいからさ。ブラもらうの」

まだパニック中の私・・・え? パンティも取った? あれ?
どさくさに紛れて部長・・・

手紙のことは全く理解出来ないけど、部長が正真正銘の変態だとい
う事だけは理解した。

「で、でも・・・何がいったい・・・?」

「はわわ・・・こ、これはやっぱり・・・亡霊の仕業です」

「さて……」

混乱する私とデカルトちゃんをよそに、サンジェルマン理事長が声を出した。

「君達の謎は…… もう一つ、これを解く事で全て明らかになる」

そついうと理事長は、私達の目の前に一枚の紙切れを出した。そこには……

「直角…… 三角形？」

> i 3 7 1 0 7 — 2 4 3 0 <

直角三角形が描かれており、その三角形の中には【157】という数字がある。斜辺、すなわち1番長い辺のところには【x】と書かれていた。

「合同数というのをご存じかな？」

理事長は私の目を見て尋ねる。

「…… はい……」

知ってる。

3辺の長さが全て有理数の時、面積が自然数nとなるならば……
その自然数nを合同数という。定義自体は簡単だし、何よりも私

の嫌いな無理数が出てこない。

例えば、ピタゴラス数として知られる(3, 4, 5)。これらを3辺とする直角三角形は、斜辺が5、他の2辺は3と4。

> i 3 7 1 0 9 — 2 4 3 0 <

面積は底辺×高さ×(1/2)の公式で

$$3 \times 4 \times (1/2) = 6$$

と出る。だから自然数6は合同数だ。あと、ちょっと難しいけど5も合同数として知られている。3/2, 20/3, 41/6も

$$(3/2) \text{ の } 2 \text{ 乗} + (20/3) \text{ の } 2 \text{ 乗} = (41/6) \text{ の } 2 \text{ 乗}$$

私の、いわゆるピタゴラスの定理を満たすので、直角三角形の3辺になる事が出来る。面積は

$$(3/2) \times (20/3) \times (1/2) = 5$$

となるので、自然数5も合同数というわけだ。

「5と6は合同数だけど・・・」

1, 2, 3, 4は合同数でない事も知られているのよね」

部長が言った。

「では、この157は合同数かな？」

「ちょっと、すぐには・・・」

「はわわ・・・」

私とデカルトちゃんには応えられなかったが・・・

「157は合同数です」

部長は言い切った。

「どんな数が合同数になるかっつのは、数学の中では未解決問題の1つ。

だけど奇素数の場合、8で割った余りが5なら・・・

その奇素数は合同数っつて知られているの。いわゆる十分条件の1つね」

むむ？ 合同数の問題っつて、未解決問題なんだ？ そんな事も知らない私。

「157は素数で・・・8で割ると余りが5。

だから、157が合同数だっつて事だけは確かよ」

エロトーク無しで私達に説明してくれる。頼りになる数学倶楽部の部長だが、相変わらず私の頭は整理がつかない。

「157は合同数が・・・」

理事長はニヤリと笑い、部長に質問した。

「では、xは？」

「……そ、それは……」

言葉に詰まる部長。

「合同数とわかっていながら……
有理数である3辺の長さを出す事は容易ではない。

スーパーコンピュータを用いてもだ」

理事長が神妙な面持ちで語り出す。

「3辺が有理数で、なおかつ157を面積とする直角三角形は……
無限個ある事もわかっている。

なのに、その辺の長さはわからない。
不思議なもんだな。数字と言うのは……」

「……」

私達3人は、直角三角形を凝視する。

> i 3 7 1 0 7 — 2 4 3 0 <

「【生】とは何か？ 【正義】とは何か？ 【愛】とは何か？」

【宇宙の起源】は？ 【神】は存在する？

この世界、答があるはずの疑問は数多い。
それこそ真実は無限にあるはずなのに……」

「……………」

「ところが、それらの答え一つ見いだすことすら容易ではない。

ふふ。この【X】……」

そんな現実を皮肉っているようだ」

何が言いたいんだろう？

「あの…… 理事長。私を呼び出したのは、いったい……？」

「その理由は明確だ」

理事長は私をじっと見つめた。

「君に、この【X】を求めて貰いたい」

「え？」

私に？ 何故？

「あの……」

私に変わって、部長が理事長に質問した。

「合同数を求めるのは、高度な数学理論を要します。

何故【現代組】の生徒ではなく、【古代組】のピタゴラス……？」

おっしゃる通り。

「この【 x 】が有理数だからだ」

理事長は即答する。

「え？」

「合同数の世界は、有理数だけで構成される。

【現代組】の生徒は実数ありきで計算し、【 x 】にたどり着けないだろう。

むしろ有理数しか知らない・・・

ましてや直角三角形のスペシャリストと言われる・・・」

「・・・」

理事長の視線が、私に突き刺さる。

「ピタゴラス君。君がこの【 x 】を求めるのにふさわしいと思ったんだ」

「・・・」

わ、私が？

「ピタゴラス君。底辺と高さが1の直角三角形の斜辺を求めるより・・・」

この【X】を求める方が、君には適した仕事だ。

そうは思わないか？」

思わないけど……

「あの…… 理事長……」

私は今の心境を正直に伝える事にした。

「正直私…… その…… あの手紙にあるように私は……
ルブラン君の事が好きでした。」

今はまだ、ルブラン君の死をまだ受け入れられなくて……
【X】を求めるような心境に…… なれません……」

「ふふ……」

理事長が不敵な笑みを浮かべる。

「？」

「全ては…… この【X】にある」

「はい？」

何？ どういう意味？

「来たまえ。3人ともだ」

理事長は立ち上がると・・・ 私達3人を、部屋の奥へと呼び寄せた。奥にはカーテンがかかっているところがあり、理事長はそれを開ける。

「・・・ 何？」

カーテンの向こうには、大きな段ボールがあつた。

「中を見せてあげよう」

そう言った理事長は、手際よく段ボールを止めていたガムテープをひきちぎる。そして・・・

大きな球体が私達の目の前に現れた。直径が1.5mぐらいだろうか？ その球体は銀色の美しい表面で覆われ、下側には何か機械じみたものが見える。パツと見では・・・ 何かの乗り物みたいな？

「はわわ・・・」

「何ですか、これは・・・？」

「・・・」

部長は無表情でそれを見つめている。まるで、この球体が何かを知っているみたいだ。

「これこそ・・・ 神の贈り物だ・・・」

「え!？」

(第17話へ続く)

第16話 合同数(後書き)

~~~~~  
次回予告

私は何が何だかわからないまま、【X】を求めるように言われる。

そしてこの【X】がわかれば・・・

なんとルブラン君が・・・？

次回 「第17話 神の贈り物」

~~~~~

第17話 神の贈り物（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は、手紙の主が私である事を証明した。

混乱する私をよそに、理事長は・・・数学の問題を私に出す。これを解けば、全ての謎を解けるといふが・・・？

第17話 神の贈り物

第17話 神の贈り物

聖フィロソフィー学園・・・サンジェルマン理事長【神】を口にした。

「はわわ・・・」

「・・・」

「神の存在を・・・理事長は認めるという事ですか？」

私達を代表して、部長が質問する。

「言っただろ？ 全ては【x】にある・・・見る」

理事長は球体の真上を指さした。そこには直角三角形が描かれており、その三角形の中に【157】と書かれている。

> i 3 7 1 0 7 | 2 4 3 0 <

「i、これ・・・さっき理事長が紙に書いたのと同じだ・・・」

斜辺に【x】と書かれているところも全く同じ。そして・・・

「テンキー？」

電卓のような数字配列のキーが、三角形の横にはあった。

【7】 【8】 【9】
【4】 【5】 【6】
【1】 【2】 【3】
【0】 【】 【】
【+】 【-】 【x】
【/】 【Enter】

【0】から【9】までの10個のキーと、2つの矢印キー。そして【+】 【-】 【x】 【/】の四則演算キーと、【Enter】・・・あとは、よくわからない【】キーが1つ。計18個。

「この球体は、先月・・・アララト山の、とある場所で発見された。」

複数の付着物を、カーボン14という年代測定法で調べたが・・・

年代はバラバラ。

最古のものは、紀元前2370年プラスマイナス80年」

「そ・・・そんな昔!？」

思わず声をあげた私。紀元前2000年もの昔に、こんな綺麗な球体があるなんて・・・絶対ありえない。

「最近のものだと、今から20数年前という奇妙な結果が出ている」

「はわわ・・・不思議な物体です」

「オーパーツ・・・」

部長が呟いた。

「な、何？ オーパーツって？」

「【Out of place artifacts】。場違いな出土品って事。つまり……」

部長は理事長室にあるガラスケースを指さす。

「その年代のテクノロジーでは作り得ない、存在し得ない物の事」

そう言えば…… 理事長は世界中の珍しい物を集めるのが趣味と聞いた事がある。このガラスケースの中にある物って……

「オーパーツ？」

「私はある研究機関の依頼を受け、この球体の材質を調べた。ところが、この合金……」

地球上にあるどんな技術をもってしても、生成し得ないものだった」

「はわわ……」

「げ、現代でも…… 作り得ない？」

「正真正銘の…… オーパーツ……」

「私への調査依頼はリミットがあつてね。ちょうど3日。」

これを譲り受けて、すでに1日が経過している。

明後日の夜には、これを送り返さねばならない」

理事長はその球体を右手でさすっている。

「ピタゴラス君！」

「は、はひー！」

突然理事長に呼ばれた私は、声が裏返った。

「できれば明日までに・・・この【X】を求めて欲しい」

何故、【X】に執着するの？

「あ・・・その【X】を求めると、何が起こるんですか？」

「実に不思議な金属で、X線による内部の様子もわかってる。

球体の中には、シンプルな構造の電子機器が内蔵されているようだ。

おそらくこのテンキーで、正しい【X】を入力すれば・・・

この機械が起動すると思われる」

球体の外側で何かを操作出来るとしたら、そのテンキーしかない。理事長の言う事が、正しいような気がしてきた。

「・・・」

「パソコンで、調べられないんですか？」

部長が理事長に聞いた。

「調べたさ……」

小さな溜息をついた理事長は、私達に問う。

「1澗かんという単位を？」

「1澗？」

何それ？ 単位？

「デカちゃん知ってます。1兆の1兆倍の、さらに1兆倍です」

「一、十、百、千、万、億、兆、京、垓、
杼、穰、溝、澗……」

部長は、単位を数え上げてくれた。

「分母分子、ともに1澗×1澗の組合せを……
スーパーコンピュータに試させてみた。

ところが全て不正解。

この【×】は、さらに上の単位で答を持っている事が判明した」

「な……」

日本のほこるスーパーコンピューター【京】（けい）。1秒間に1京以上の計算をこなしたと認定されている。1秒間に1京もの計算が可能だとして、1潤もの計算をさせるには・・・1京の1京倍の1万倍の秒数かかる事になる。

それを時間に換算すれば・・・

「3兆年かかるです」

デカルトちゃんは、暗算が得意だ。

「3兆年って・・・」

呆然とする私。

「宇宙年齢は、約137億年と言われているけどね」

部長が追い打ちをかける。

「無理！！ 無理でしょ！？ スパコンでも3兆年かかる計算を・・・

私が24時間で！？ 絶対無理！！」

それに・・・

「仮にこの【X】を求めたとして・・・ この機械が動いたとして・・・

その先に、何があるっていうんです！？」

思わず逆ギレ気味に、理事長につめよった。

「これで3度目だ。その先には・・・全てがある」

「意味、わからないです」

「僕の仮説が正しければ・・・」

「？」

不意に部長が急に語り出す。

「この機械が動けば、ルブラン君が・・・」

え？　なんで、ここでルブラン君が出てくるの？

「ルブラン君が生き返る・・・」

「ええええええ！！！！？？」

(第18話へ続く)

第17話 神の贈り物（後書き）

~~~~~  
次回予告

部室に戻ってきた私達。ルブラン君の事を部長に聞くけど、はぐらかされてしまう。

【from】の手紙には、謎の数字【1729】が書かれていた。

それが何と、【x】を求めるための・・・

~~~~~  
次回 「第18話 インドの魔術師」
~~~~~

第18話 インドの魔術師（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は、手紙の主が私である事を証明した。

混乱する私をよそに、理事長は数学の問題を私に出す。これを解けばルブラン君が生き返る・・・部長はそう言った。

~~~~~  
第18話 インドの魔術師

第18話 インドの魔術師

「ねえ、部長。ルブラン君が生き返るって、どういふ事？」

部室に戻ってきた私達。

「さあ？ カマかけて言ってみただけだから・・・」

サンジェルマン理事長は・・・部長の言葉を肯定も否定もしなかった。

「・・・」

実はルブラン君は脳死状態で、体はまだ生きていたのか？ でも今朝、全校生徒の前でルブラン君の死を報告してるし・・・

あるいはあの機械の中に、死者をよみがえらせる薬がある？ まさかね。

「それにしても・・・」

謎が多すぎる。

「この手紙・・・」

【 f r o m 】

理事長から受け取った【ピタゴラスに告ぐ】の手紙。この中には、



毎度のごとく便せんが1枚。その便せんの中には・・・

【1729】

とだけ書かれていた。

「何、コレ？ 意味わかんない」

「【X】じゃない事だけは確かです」

もう、ワケわかんない事だらけ。

> i 3 7 1 0 7 — 2 4 3 0 <

この【X】が求められたら・・・

「ホントにルブラン君・・・ 生き返るのかもよ」

部長はそう言うけど・・・

「死んだ人が生き返るなんて、ありえない」

私は死んだルブラン君を病院で見ている。

「ありえないです」

全てを疑うデカルトちゃんでも・・・ 死んだ人が生き返るなんて、思っではない。

「まあ、理事長曰く『全てはこの【X】にある』らしいからな。

ピタ子、早く求めてよ」

そんな事言われても・・・

「暗算得意よね？ デカルトちゃん」

「デカちゃんでも」 さすがにこんな大きな数、無理です」

だよな。スパコンでも計算出来ないんだから・・・

「僕、思うだけだよ。」

まず攻めてみるのは、この【1729】だと思うよ」

部長はテーブルの上に広げられていた便せんを指さした。

「はい、デカ子！ 素因数分解！」

「1729は 7かける13かける19です」

「うわ・・・ 絶対素数だと思ったのに。」

僕のカンもにぶったな。うん・・・」

【現代組】の生徒達は、まず素数を疑う・・・ 有名な話だ。

ガラガラ・・・

不意に部室の扉が開いた。そして1人の生徒が入ってくる。

「ラ、ラマヌジャンちゃん！！」

部長が驚いたような声をあげた。

「こんにちは、ラッセルちゃん」

ブラパラ事件で唯一、ブラジャーをはぎ取られなかった子。美しい黒髪に、これまた美しい黒目の女の子。

「ピタゴラスちゃんにデカルトちゃんも・・・ お久しぶり」

「え？ あ・・・ お久しぶり？」

「はわ？」

昨日と何か雰囲気が違う。何か今日は・・・ 友好的なオーラ、出てない？

「な、何しに来たの!？」

やや焦り気味で喋る部長。どうもラマヌジャンちゃんは、苦手らしい。

「うん・・・ 私、最近体の調子が悪くて・・・

明日、田舎に戻るの。」

だから自分の物、取りに来たの」

そう言うと彼女は・・・

【ナマギーリ女神の、おかげです】

という、習字作品をはぎ取った。そして部屋を出て行くつもり。

「はわ！？ それを取りにきただけですか？」

デカルトちゃんが声をかけると

「うん。昨日で、本は持ち帰ったから・・・今日はこれだけ」

元気なさそうに応えたラマヌジャンちゃん。

「？」

ふと机の上にある物を見て、彼女はよってくる。

「せんななひやく・・・にじゅうく・・・」

【1729】

例の手紙を見て呟いた。

「あ？ これ？ 素数でもないし、つまらない数なだけどさ・・・」

部長が言つと・・・

「そんな事ない・・・とっても神秘的な数だわ」

え？

「どじが？」

「1の3乗たす12の3乗は1729だし・・・  
9の3乗たす10の3乗も1729」

「確かにそうですけど」

暗算の得意なデカルトちゃんだけが頷いている。

「この数字は、2組の異なる2つの立方数の和で表す事ができる・・・  
最小の数ですわ」

え？ そうなの？ 1729がその・・・ なんとらの最小数？

「はわわ〜 デカちゃんでもわかんないです〜」

「・・・」

「【現代組】ではこの子、【インドの魔術師】の異名を持ってるからね。

僕の知る限り、数字の感覚は世界一よ」

「インドの魔術師？」

部長が世界一というぐらいだから・・・ ホントにすごい子なんだ。

「でもね、この子・・・」

数々のすごい公式発見してくれるのはすごいな〜って思うんだけど・・・

証明はしてくれないのが、玉にキズなのよね」

「……」

ラマヌジャンちゃんは、無言で手にもっていた物を広げて見せた。

【ナマギーリ女神の、おかげです】

そして弱々しく、ニコツと笑う。

「……」

なんだか、独特の空気を持つてる子だ。

その時！！

私の中に何かがひらめいた。

「じゃあ、みなさん。」「きげんよう……」

「ちょっと待って！！」

出て行くところとするラマヌジャンちゃんを引き留める。

「ひょっとしてあなた……この【x】、わかったりしない？」

私はラマヌジャンちゃんに、理事長からもらった直角三角形の図を見せた。

「どつ？ 合同数の問題なんだけど」

「合同数……」

ラマヌジャンはじつとそれを見つめたあと……

「……」

私を見つめ、こう言った。

「216垓、6655京、5693兆、  
7147億、6130万、9610分の……」

4113垓、4051京、9227兆、  
7161億、4938万、3203

「え？ え？ ちょ……」

「はわわ……」

「嘘……でしょ？」

まさか、【x】をいい当てた？

「ちょっと待ったあ！！」

部長が大きな声をあげる。

「理事長が言うには、この【x】……」

1潤、すなわち1兆の1兆倍の1兆倍の数字を超えてるのよ。

1垓<sup>がい</sup>は、1兆の1億倍。今は【x】じゃないわ!！」

確かにそうだ。でもラマヌジャンちゃんは、弱々しく笑って言い返す。

「私が言ったのは、【x】じゃなくて、この数……」

そう言うと彼女は…… 直角三角形の斜辺じゃなく、底辺の方を指さした。

「な……何で? 何でわかるの!?!」

「……」

ラマヌジャンちゃんは、無言でそれを広げて見せる。

【ナマギーリ女神の、おかげです】

「いや……」

それ?

「ま、まあ…… この子は、不思議ちゃんだから……」

苦笑いする部長。私はラマヌジャンに視線を合わせ

「でも、そこがわかるなら…… 【x】もわかるって事でしょ?」



そう尋ねる。

「もちろん。でもそれは・・・あなたが考えるべきですわ」

「ど、どうして!?! ここまで来たら・・・」

ズバリ教えてもいいじゃない!?!」

ラマヌジャンちゃんは、やっぱり弱々しく笑った後・・・

【ナマギーリ女神の、おかげです】

を広げて見せた。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

部長もデカルトちゃんも一斉に固まる。意味わかんないけど、説得力を感じるのは何故だろう?!

「それじゃ私は、さよならですわ・・・」

「あ・・・ ちょ・・・」

ラマヌジャンちゃんは、そのまま部屋を出て行った。

「ま、待って・・・」

追いかけてよとした私の肩を、部長が捕まえる。

「ピタ子。大丈夫。」

1辺の長さがわかれば・・・面積からもう1辺の長さも出る。

でしょ?」

「う、うん・・・」

「あとはあなたの専売特許で、【×】出せるじゃん」

その通りだ。面積がわかっている直角三角形はどこか1辺でもわかれば、残り全てを計算できる。そう・・・

【ピタゴラスの定理】で!!

「そ、そうよね。じゃあ、早速計算するわ!!」

意気揚々と紙と鉛筆を用意し・・・

「・・・」

そのまま固まる。

「どした? ピタ子?」

「・・・ 何だっけ?」

「何が?」

「さつき、ラマヌジャンちゃんが言った数字・・・」

「あ・・・」

あんな長い数、1度聞いて覚えられないわけがない。

「や、やっぱりもう1度ラマヌジャンちゃんを呼び出し・・・」

その時

「216垓、6655京、5693兆、  
7147億、6130万、9610分の・・・」

4113垓、4051京、9227兆、  
7161億、4938万、3203です」

「え？」

「で、デカ子？」

「はい。デカちゃん、ちゃんとメモってました。ほら」

そう言うと、ものすごい長い数字の分数が書かれている用紙を見せた。

何とデカルトちゃん。たった1回しか言わなかった、ラマヌジャンちゃんの言った数字を・・・全てメモっていたのだ。

「デカした、デカ子!!!!」

「きゃ〜、デカちゃん、褒められると伸びる子です〜」

この子は抜けているようだけど・・・ 要所を締めるタイプだ。

「よし！ ご褒美に僕が・・・ おっぱいを大きくしてあげよう！」

大きなヤマを超えたからだろう・・・

「きゃ〜！〜！」

目の前の2人は、いつもの2人に戻っていた。

ラマヌジャンちゃんが嘘をついていたか、あるいはデカルトちゃんのメモが間違っていない限り・・・

【X】を求める事は出来る。

先にバラしちゃうけど、ラマヌジャンちゃんもデカルトちゃんもミスはなかった。つまりあの数字は正しいものだ。

そうとなれば・・・

さっと【X】求めて、すぐにも理事長の元へ行こう。

そう思っていたんだけど・・・

(第19話へ続く)

第18話 インドの魔術師（後書き）

~~~~~

次回予告

ついに【X】を求めた私。理事長室にあった、あの球体にその数字を入力する。

すると・・・

~~~~~

次回 「 第19話 【X】、そして球体の正体 」

~~~~~

第19話 【x】、そして球体の正体（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

気になっていたあのラブレター。何とびっくり！ 書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えのない私に、理事長は数学の問題を出す。

私はラマヌジャンちゃんのヒントを足がかりに・・・

第19話 【x】、そして球体の正体

第19話 【X】、そして球体の正体

サンジェルマン理事長から、【X】を求めるように言われて24時間後。

3月26日。金曜日だ。

私、以下2名は理事長室にいた。

「【X】を求めた？」

理事長が聞き

「はい」

私に応える。

「・・・」

意外と手間がかかった。1辺の長さがわかれば、面積からもう1辺の長さはすぐにわかる。でも、2辺の平方和をとる作業は・・・かなりの重労働だった。

最初、コンピュータにやらせようと思ったんだけど・・・あれだけの桁数、しかも分数計算となると、コンピュータもオーバーフローを起こしてしまう。結局、手計算で頑張ったんだけど・・・

2つの巨大な分数を平方して、通分して、和をとって、足して、約

分して、ルートをとる作業・・・

徹夜してなおかつ、ついさっきまで計算して、ようやく【x】を求めた事ができた。暇な読者がいれば、あの【x】を是非とも求めて欲しい。PCをもってしても、簡単に出せる代物ではないわよ。

「では・・・」

理事長と私達は、あの球体の元へと歩み寄った。理事長はテンキの前に手をかざすと

「その数字、まずは分子から言いたまえ」

「桁を言つとわかりづらくなるので・・・数字をそのまま言います」

「わかった」

「22440351770433696992455751309
06674863160948472041」

自分で言つてて、どんな単位かもわからない。後で部長から聞いたから【極】って単位なんだって。そんな単位、聞いた事無いんだけど？

理事長はその数字を打ち込み、【/】（スラッシュ）キーを押した。

「では、分母を」

「 8 9 1 2 3 3 2 2 6 8 9 2 8 8 5 9 5 8 8 0 2 5 5 3 5 1 7 8 9
6 7 1 6 3 5 7 0 0 1 6 4 8 0 8 3 0 です・・・」

それにしても、この【x】・・・無限にあるらしい。最も簡単な解でも、これだけの恐ろしい有理数が出てくる。ならば、他にある無限個の解は・・・

考えるの、ヤメておこう。

「・・・」

理事長は慎重に数字を打ち込んでいく。そして・・・

【Enter】キーを最後に押した。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

緊張の時は流れる。そしてその時はきた。

音も立てず、その球体のテンキーの下側・・・

大きな円の穴が開いたのだ。

「・・・」

その場にいた全員、息をのむ。

正面から見ると球体の横側・・・ といっても球だから、どこが横
つては言えないんだけど・・・

テンキーの下側が半径1mぐらいの円となり、穴が開いている。誰
が見ても入り口だ。そこから球体の中を覗くと・・・ 小さなパネ
ルみたいなのが見えるだけで、イスもなければ柱なんかも見あた
らない。

「や・・・ やった!!!」

ようやく声をあげたのは私。

「す、すごいです〜 はわわ〜」

「・・・」

「・・・」

部長と理事長は沈黙していたけど・・・ 難しい数学の問題を1つ
解いたというのは、私にとって素直に嬉しい。

ひとしきり喜んだ後は・・・ あの言葉が気になった。

【この機械が動けば、ルブラン君が生き返る】

部長は確かにそう言った。もうすぐ、その言葉の真相がわかるはず
だ。

「で？ 理事長、この後は？」

私は理事長に声をかける。

「……………」

球体を呆然と見つめている。

「理事長？」

「え！？ あ、ああ……………この後だな……………」

放心状態だった理事長が、ようやく私の声に応じた。

「……………」

左手の拳を丸め、それを鼻っ柱にあてる。

「……………」

そして、何かを悩んでいるようだ。迷っているような表情を見せた後……………」

私に視線を合わせ、こう言った。

「我が子を……………救って欲しい……………」

な……………」

「何ですって!?!?」

「何ですって!?!」

「はわわ〜」

デカルトちゃんだけは、ハモれなかった。

「我が子、ルブランを・・・君達なら救えるはず・・・」

ちよ・・・まさかの衝撃の事実。ルブラン君は、サンジェルマン理事長の子供!?!

「ル、ルブラン君の・・・お父さん？」

呆然とする私は、理事長に聞いてみる。

「そうだ。ルブランは、私の子だ」

「・・・」

それを理解するのに、私達3人はしばしの時間を要した。

「ルブラン君を・・・救ってくれ？」

何とか親子関係を受け入れた私は、次の質問をする。

「ああ」

「ちよ、ちよつと待ってください、理事長。
すでに死んだルブラン君を救えっといわれても・・・」

混乱の極みにいる私の言葉を遮おさえって、部長が声をかけてきた。

「ピタ子、まだわかんないの？」

「な、何が？」

「デカちゃんも、何が何だか？」

部長だけは……【何か】がわかってるようだ。

「コレに乗ってさ……2日前に戻るのよ」

そして、あたかもそれが当たり前のように言っただけだ。

「ですよ？ 理事長？」

部長が理事長に言葉をかけると……

「……」

理事長は無言で頷いた。

「え？ え？ 何？ 2日前に戻るって？」

って事はまさか……この球体って……

「タイムマシン！？」

「タイムマシン！？」

最初で最後・・・

私とデカルトちゃんは、綺麗にハモった。

(第20話へ続く)

第19話

【X】、そして球体の正体（後書き）

~~~~~

### 次回予告

あの球体がタイムマシン!? そんな事、信じられるわけがない。

まずは乗ってみようと、部長が言った。過去へ行けなければそれで  
おしまいとい諭され、私達はその球体の中へと入って行く。

そして・・・

次回 「 第20話 時空を超えて 」

~~~~~

第20話 時空を超えて（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

気になっていたあのラブレター。何とびっくり！書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えのないのに、なんで!？

そして私達は・・・理事長室で、ある球体の前に立つ。

何とそれは・・・

~~~~~




第20話 時空を超えて

私とデカルトちゃんは・・・

その球体がタイムマシンという事を、受け入れる事がなかなか出来ない。

ただ、タイムマシンの存在を認めてしまえば・・・

これまでの不可解な事は、説明がつくような気がする。

「つまりこのタイムマシンで、過去に戻り・・・

交通事故に遭うはずのルブラン君を・・・助けると?」

まだ半信半疑の私。いつからか敬語を忘れている。

「その通りだ」

理事長は言いきった。

「はわわ〜 デカちゃん、思っんですけど〜」

タイムマシンを受け入れられないもう1人・・・デカルトちゃんが声をかけてくる。

「ルブラン君のお父さんが理事長なら〜

理事長自身が、子供を助けに行くべきでは〜

ないでしょうか？」

冷静に考えれば、もっともな意見だ。だが理事長はクビを横に振る。

「出来る事ならそうしたい。だが私は・・・

2日前、君達を見た。ルブランが車にひかれる日の朝・・・

君達3人が、学校の屋上で楽しそうに話しているのを・・・」

そういえば理事長・・・ 一昨日おととい部室の前で会った時、そんな事言
ってた。

「しかしその日の午後、君達に会った時・・・

朝に3人でいた事実はないという」

実際、その朝はみんなバラバラに登校している。

「デカちゃんは、お昼過ぎに登校しました」

「朝には、いるはずのない君達を見て・・・ 昼にはそれが届いた・
・・・」

理事長の視線の先には、あの球体・・・ タイムマシン？ がある。

「そしてその日の夕方には・・・

私は手紙を渡すピタゴラス君にも出会っている」

えっと・・・

「【from】の手紙だ。下手な変装をした君が渡した」

あゝ．．．あれか。

「あの時、私はこう思った。

きつと君達3人は．．．

我が子を救うため、未来から来たのだと．．．」

「なるほど．．．」

部長だけが頷いている。私とデカルトちゃんは、今なお理事長の話を飲み込めない。飲み込めないけど．．．

「えっと．．． 2日前、未来から来たであろう私達を見たから．．．
．
今からコレに乗って、過去へ戻れと．．．

おっしやってる．．． んですね？」

この乗り物がタイムマシンという前提で、私は理事長に聞いた。

「．．．．．」

理事長は無言で頷く。

「でも．．．」

「あの子」

私の言葉を、部長が遮る。

「ピタ子、言ってたじゃん」

「え？」

「ほら、ラブレターの件で・・・」

【私が盗まなければ・・・】

ルブラン君は公園に行っていた。交通事故にも遭わなかった！！

「ってさ」

た、確かにそうは言ったけど・・・

「チャンスじゃない？ 自分の過ちを正す。

愛しのルブラン君をこの世に戻す・・・ね？」

「う、うん・・・ それは、そうなんだけど・・・」

私の視線は【タイムマシン】とやらを捉える。

「まずは乗ってみようよ。」

デカ子もピタ子も、タイムマシンに懐疑的なんですよ？

「う・・・」

理事長のいる前で【うん】とは言っていない。

「まあ、表情見てりゃわかるって。
だからまず、コレに乗ってみてさ・・・」

過去へ行けなければ、僕らにできる事は無い。
その時点で、この話は終わりって事でいいじゃん」

「・・・」

部長の言う事、一理ある。

「デカちゃん、難しい事嫌いです〜。だから部長に賛成します〜！
まずは、この乗り物に乗ってみるです〜」

「そ、そうね。過去に行くなんて、考えられないけど・・・
まずは乗って、ダメならそこまで・・・よね・・・」

「じゃ、ピタ子からどうぞ」

え？ わ、私？

「ルブラン君のラブレターを盗んだの、ピタ子でしょ？」

「う・・・」

で、でもさ・・・ 自分で自分のラブレターを盗ったって事になる
のよね？

それがルブラン君の死に繋がったって・・・ 何か変じゃない？

「・・・」

考えれば考えるほど、余計わからなくなる。

「わ、わかったわよ・・・」

もし過去に行くことが出来れば、全ての謎が明らかになるのかも
れない。

「行けばいいんですよ」

まずは行動してみよう。思考はその後。

「ほら、リュックも忘れずに」

部長がリュックを手渡した。

「・・・」

それを背負った私は、理事長と視線を合わせる。

「これを持って行くといい」

理事長が1本の鍵を渡してくれた。

「本校のマスターキーだ。校内なら、どの部屋も開ける事が出来る」

「・・・」

鍵を受け取った私は・・・球体の横に開いた円から中に入る。

「・・・」

直立だと頭がぶつかっちゃうけど・・・ ちよつとかがむ程度で、立ったまま中に入る事が出来た。

「わ・・・」

外からは銀色の表面だったけど、中から見ると・・・

「外が見える・・・」

何て言うか、全面ガラス張りみたいな感じ。

「お!? マジックミラー号みたい! いいね〜
興奮するね〜 らっせる らっせる〜!」

セクハラオヤジが2番目に乗り込む。

「はわわ〜 中からは外が丸見えです〜 不思議です〜」

そして3人目はデカルトちゃん。直径1.5mぐらいの球の内部・・・
・狭いけど、3人ぐらいなら入れる。無理すれば、あと2人ぐら
いは入れそうだ。

「どれどれ・・・」

球体の中にある物といえば・・・ 中央にある小さなディスプレイと、その下にあるキー群。キーの横や球体上部には、いくつかパネルのようなボタンのような物もある。

【7】 【8】 【9】
【4】 【5】 【6】
【1】 【2】 【3】
【0】 【】 【】
【+】 【-】 【x】
【/】 【】 【Enter】

球の外にあったのと同じヤツだ。興味津々の部長が、まっさきにパ
ネルに触れる。

「なるほどね。シンプルでいいわ・・・」

【】 【】 【】 【】 【】 【】 【】 【】 【】 【】

小さなディスプレイの1番上には、こんな表示がある。

「・・・」

それらを見つめる部長。

「こういうのはね、説明書なんかなくても操作出来るってのが基本
なのよ・・・」

「根拠は？」

「ない。けど、難しい機械ほど、それがあべき姿。
数学だってさ・・・」

難しい記号に見えて、実は一番シンプルな記号を使ってるもんね。

デカ子、扉閉めて」

「は、はい……」

デカルトちゃんは、開いた扉を閉めようとするが……

「スイッチがないです」

「……」

私は天井にある小さなボタンを見つけたので

「こ、これかな……？」

押してみた。すると音も立てずに、扉が閉まった。

「はわわ〜 Pちゃん、正解です」

なるほど。直感に従えば……それが正しいのか。

「さて。今日は3月16日だから、2日前だと……」

パネルを操作した部長は

【 3 【 1 4 【 : : 【

今年の西暦と、月日を入力する。

「時間、どじする？」

部長は自信満々だが・・・そんな入力でいいのだろうか？ まあ、2日前に行けるなんて、未だに半信半疑だけど。

仮に行けたとして

「・・・・・・・・」

ルブラン君を助けるには・・・

「何をすれば正解なんだろう？」

「僕もわからない。その場の状況で判断するしかないね、今のトコは。」

ピタ子。2日前、何時に登校した？」

「えっと・・・朝の6時45分ぐらい」

「はわわ〜 デカちゃん、爆睡中の時間です〜 そんな時間に登校なんて〜」

【 3 【 1 4 【 6 : 3 0 : 0 0 【 0

そう入力した部長は

「多分コレで・・・」

【Enter】キーを押した。

「ちょ・・・心の準備が・・・」

【Are you OK? (Yes / Cancel)】

ディスプレイにそう表示され、【Cancel】の方が暗転している。PCなんかでよく見る画面だ。

「そ、そうよね・・・確認画面出るのが普通よね。
ねえ、部長。少し深呼吸してから・・・」

私のセリフの途中で部長は・・・

【Enter】と、押した。

「ちょ・・・」

「迷いは禁物！！ 過去へGo!!!!」

「・・・」

「・・・」

何も感じない。

「あれ？ 慣性の法則的なもの、感じないわね？」

部長がポツリという横で・・・

「はわわゝ 失敗です」

「何にも動いてない・・・」

この乗り物の中からは、外が丸見えだけど・・・ 外の様子も全く
変わり映えしない。

「失敗ね」

そう言った私は、天井のボタンを押した。音も立てずに扉が開く。

「うん。おかしいな」。

グラヴィトンだけは、ブレインを飛び越えるから・・・

絶対【G】が、かかるはずなんだけど・・・」

ソーカルちゃんみたいな事を言う部長を置き去りにして・・・ 私
とデカルトちゃんは、球体の外に出た。

【やっぱりダメでした、理事長】 そう言おうと思ったのに・・・

「あれ？ 理事長は？」

「はわわ？ どうか行っちゃいましたです」

理事長室の出入り口に目をやると、ドアが閉まっている。いや・・・

「鍵、かかっている・・・？」

「はわ？ 何か変です」

チュンチュン・・・

「そう言えば・・・電気が点いてない・・・」

窓から差し込む強い日差しのおかげで気づかなかったけど・・・
いつの間にか室内の電気が消えていた。

「スズメの声が聞こえます」

何かがおかしい。私は窓際へ歩み寄ると、カーテンを開け・・・
外を見る。

「太陽が・・・」

低い位置にある。まるで今は・・・

「朝？」

「なんだ。ちゃんと2日前の朝に来てるじゃん」

「ラッセル　ラッセル」

いつの間にか後ろに立っていた部長が、嬉しそうに笑っていた。

「嘘・・・」

今が2日前の朝？　嘘よ・・・でも、どう見ても外は朝・・・

「ど、どうやって・・・2日前の朝だと証明するの？」

思わず数学者のセリフを言った私。

「そんなの簡単よ。ピタ子、携帯持ってるでしょ？」

「う、うん・・・」

背負っていたリュックから、携帯を取り出した。

「表示、見てみなよ」

「・・・」

【3月14日(Wed) 06:31】

「な・・・」

思わず声をあげた。

「はわわ〜！ デカちゃんの携帯も、一昨日の表示になっています〜
しかも、午前6時31分です〜」

「な・・・」

何てこと・・・？

「じゃ、じゃあ・・・ 私達は今・・・
過去の世界にいるって事!？」

「はわわ〜」

「ラッセル ラッセル」

(第21話へ続く)

第20話 時空を超えて（後書き）

~~~~~

次回予告

ルブラン君が死んだ日にタイムスリップした私達。

部長は相対性理論の創始者、アインシュタインちゃんと仲が良く・

・  
タイムトラベルに関しても、色々議論しているという。

私達はそんな部長のアドバイスを聞いて、行動する事にした。

次回 「第21話 バタフライエフェクト」  
~~~~~

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1365z/>

ピタゴラスちゃんのジレンマ

2011年12月16日00時51分発行